三重県埋蔵文化財調査報告 320

伊賀市西之澤

天道遺跡（第２次）発掘調査報告

２０１０年１０月
三重県埋蔵文化財センター

例言

1．本書は三重県伊賀市西之澤に所在する天道遺跡の第２次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は平成19年度柘植川水管橋下部工事及び取り付け配管工事に伴って行われた。
3．現地での調査は、平成19年度に三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った。発掘調査を行った面積は593㎡である。
4．発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体：三重県教育委員会
調査担当：三重県埋蔵文化財センター調査研究Ｉ課
主幹：長谷川哲也　　主査：小濵　学・西村美幸・岡田　実
技師：萩原義彦・石井智大　　臨時技術補助員：山本達也

5．本書の執筆・編集は石井智大が行った。
6．現地における発掘調査にあたっては、三重県企業庁伊賀水道建設事務所の方々には多大なるご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。
7．天道遺跡第２次調査に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

凡例

1．本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「上野」などの地図類を用いている。
2．本書で用いた座標は、すべて世界測地系にもとづいている。
3．本書で示す方位は、すべて座標北を用いている。
4．本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）1997『新版標準土色帖』（19版）日本色研事業株式会社に拠る。
5．本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。
ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　Pit：柱穴・小穴
6．遺構の土層断面図中の斜線部分は地山を示している。
7．遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としている。縮尺は図中スケールにて明示している。
8．須恵器の実測図中では回転ヘラケズリの境界を実線、回転ヘラケズリの単位を１箇所切った実線で示している。
9．写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺物写真の縮尺は不同である。

目次

第Ⅰ章　前言 …… 1

第Ⅱ章　位置と歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 8

第Ⅳ章　調査のまとめ …… 20

図版目次

第１図　調査区位置図 …… 2
第２図　周辺主要遺跡位置図 …… 5
第３図　調査区全体図 …… 9
第４図　ＳＨ204平面図・土層断面図 …… 10
第５図　ＳＨ207・214平面図・断面図 …… 11
第６図　ＳＢ205・206・209平面図・断面図 …… 13
第７図　ＳＫ201・203・211平面図・断面図 …… 14
第８図　ＳＨ204出土遺物実測図 …… 16
第９図　ＳＨ207・214、ＳＢ205・209、ＳＫ203・210・211、ＳＤ202・208、Pit17出土遺物実測図 …… 17
第10図　古墳時代竪穴住居分布図 …… 20

表目次

第１表　遺構一覧表 …… 24
第２表　出土遺物一覧表① …… 25
第３表　出土遺物一覧表② …… 26

写真図版目次

写真図版１ …… 29
　掘削前状況（南東から）
　調査区全景（東から）
写真図版２ …… 30
　ＳＨ204（南から）
　ＳＨ204カマド検出状況
　ＳＨ204貯蔵穴遺物出土状況①
　ＳＨ204貯蔵穴遺物出土状況②
　ＳＨ204（東から）
写真図版３ …… 31
　ＳＢ205（北西から）
　ＳＢ206（南東から）
　ＳＢ206（東から）
　ＳＢ209・ＳＨ207（北東から）
　ＳＢ209・ＳＨ207（北から）
写真図版４ …… 32
　出土遺物①
写真図版５ …… 33
　出土遺物②
写真図版６ …… 34
　出土遺物③
写真図版７ …… 35
　出土遺物④
写真図版８ …… 36
　出土遺物⑤

第Ⅰ章　前言

第１節　調査に至る経緯

①既往の調査

天道遺跡は伊賀市西之澤に所在する[1)]。当該地域において計画された県道川東佐那具線特殊改良第１種事業に伴って昭和62年度に行われた、三重県教育委員会による分布調査によって発見された遺跡である。翌年度の昭和63年度には遺物の散布範囲において範囲確認調査が行われ、17箇所に設けた調査坑のうちいくつかで遺構や遺物の存在が確認された。そして、同年度に工事によって影響を被る部分を中心として第１次調査が行われている[2)]。

第１次調査が行われた場所は、今回の第２次調査の西側にあたる部分であり、現状では県道川東佐那具線の道路となっている。およそ900㎡の範囲について発掘調査が行われ、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多数検出されている。

この調査においては、古墳時代後期の遺構・遺物がまとまって検出されたことが特筆される。古墳時代後期の竪穴住居は７棟が検出されており、遺物が出土しなかった残りの１棟についても形態などから古墳時代後期のものとみられる。

こうした竪穴住居群の存在から、天道遺跡は古墳時代後期の集落であったことが判明した。竪穴住居や包含層などから出土した須恵器は、いずれもＭＴ15型式からＴＫ10型式古段階[3)]に相当すると考えられるものであり、およそ６世紀前半に営まれた集落である。竪穴住居以外の遺構は少なく、土坑がごく少数検出されているのみである。掘立柱建物は確認されていない。

また、平安時代後期～鎌倉時代初頭の土坑も検出され、瓦器などが出土している。この時期のものと思われるピットも複数検出されているが、掘立柱建物の存在を示すような状況は確認できなかったようである。

出土遺物の中では、甕の底部外面に籠の圧痕が残されている、いわゆる籠目土器が注目される。報告書では、全国的な類例の収集や分類などを踏まえた検討が行われており、古墳時代初頭のものとされている[4)]。当時としては全国的にも出土例が少ないものであり、天道遺跡の出土事例と報告書におけるその位置づけは、この種の遺物の研究史上において重要なものであった。

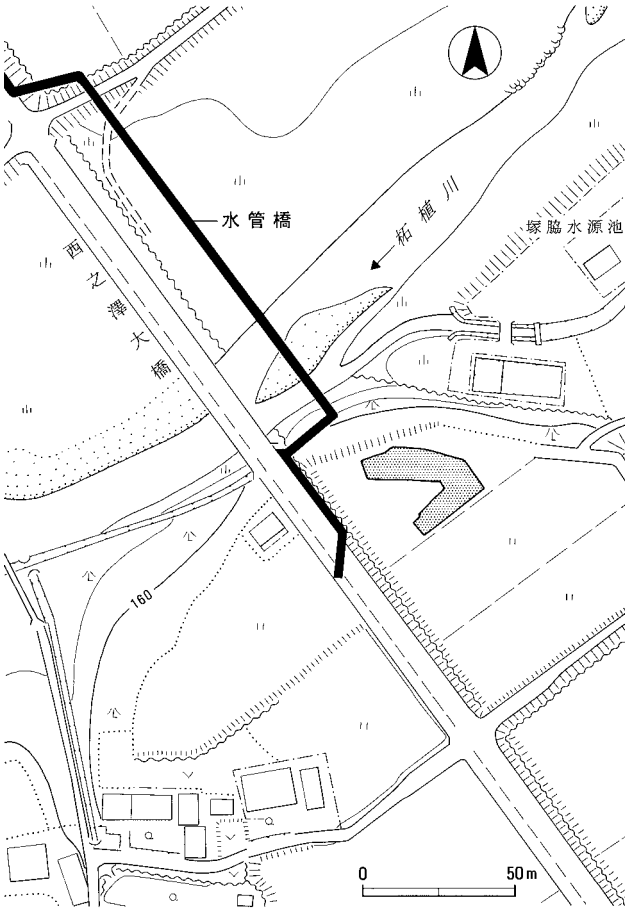
このほかにも、遺構そのものは検出されていないが、縄文時代後期や弥生時代中期の土器が出土したことは、そうした時期の遺跡の調査例が少ない柘植川流域においては貴重な情報である。縄文時代後期の土器は小片が多いものの、後期前葉から後期末葉までのものが含まれており、天道遺跡周辺では後期を通じて断続的に人間の活動が行われていたものと考えられる。

②第２次調査に至る経緯

第１次調査が行われた後には、しばらくは周辺で目立った開発が行われることはなかった。しかしながら、平成19年度に柘植川水管橋下部工事及び取り付け配管工事として、柘植川に橋脚を設置して水道管を架け渡すという事業が行われることとなった。水道管を架構する地点は天道遺跡の第１次調査が行われた場所の近くであり、天道遺跡の周辺に工事が及ぶこととなった。

水管橋を架構する工事自体については、工事内容や工法などからみて、地下に存在する埋蔵文化財に及ぼす影響はほとんどないものと考えられた。ただし、この工事を行うためには、天道遺跡の存在する河岸を大きく掘削して重機が柘植川の河床へ進入するための仮設道を設置することが必要であり、その掘削工事による埋蔵文化財への影響が大きいことが判明した。

この仮設道の設置が計画された範囲は、現状では耕作地となっていたが、昭和63年度の範囲確認調査において２箇所に調査坑が設けられており、ピットなどの遺構や須恵器・土師器などの遺物の存在が確



第１図　調査区位置図（1:5,000）

認されている[5]。そこで、事業部局との協議の結果、仮設道の設置範囲については天道遺跡第２次調査として急遽発掘調査を行うこととなった（第１図）。

③法的手続き

天道遺跡第２次調査にかかる文化財保護法等による法的手続きは、以下の通り行っている。

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項

平成19年９月３日付け、企上伊第148号（県教育長あて県企業庁長通知）

・文化財保護法第99条第１項

平成19年９月21日付け、教埋第243号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

平成20年２月18日付け、教委第12-４-28号（伊賀警察署長あて県教育長通知）

註

1）現在の行政上の地名は「西之澤」となっているが、近年までは「西之沢」であった。本報告では現在の位置関係を表す場合は「西之澤」、過去の状況について言及する場合は「西之沢」と表記する。

2）三重県教育委員会1989『天道遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告89

3）本報告においては、須恵器の編年について以下の文献を参照している。

田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ、田辺昭三1981『須恵器大成』 角川書店

4）籠目土器は古墳時代後期前半の竪穴住居であるＳＢ２から出土しているが、埋没過程における混入と推定されている。ただし、天道遺跡ではこの他に弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置づけられる遺物はほとんど出土していない。第１次調査で出土した受口状口縁甕があげられる程度である。また、その後の研究の中では、甕の底部外面に籠圧痕が残るものは５世紀後半以降に東日本を中心に例が増加することが指摘されている（鐘方正樹・角南聡一郎1998「籠目土器と笊形土製品」『奈良市埋蔵文化財センター紀要　1997』 奈良市教育委員会）。以上のような点からみれば、天道遺跡の例も古墳時代後期のものと考えておくことが妥当であろう。

5）三重県教育委員会1989

第２節　調査の方法と経過

発掘調査にあたっては、まず遺構上面に堆積している表土および包含層の一部を重機で除去した。その後、人力掘削によって遺構検出を行った。

今回の調査については時間的な制約が厳しかったため、調査区全体にわたるようなグリッドの設定や、それに基づく包含層出土遺物の取り上げなどは行っていない。

遺構検出後に、各遺構の掘削を行った。土層の堆積状況や遺物の出土状況などについて、必要に応じて写真や図面などの記録を取りながら掘削を進めていった。掘削完了後に、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構については1/20の縮尺の平面図を個別に作成

した。

また、掘削と併行して各遺構に遺構番号を付与していった。遺構番号は、基本的に埋土中から遺物が出土した遺構のみに付与している。遺構の種類にかかわらず１から順に通番で番号を付与し、番号の前に遺構の性格を示すＳＨ・ＳＢなどの略称を冠して遺構名称としている[1)]。ただし、ピットのみは他の遺構とは区別して別途１から順に通番で番号を付している[2)]。

すべての遺構の掘削が完了した後には、調査区の全体図を平板を用いて1/50の縮尺で作成した。

なお、今回の発掘調査の契機となった仮設道の造成にあたっては、地山を深く掘削してスロープを設けるため、仮設道の側面にある程度の傾斜をもった法面をつける必要があった。この法面部分の整形については、工程・工法上の問題から、仮設道の造成工事に伴って施工されることとなった。そのため、当初の調査範囲の調査終了後に仮設道造成工事が開始され、法面整形が始まった段階で、当初の調査区の周囲を２～４ｍほど拡張する形で追加調査を行った。一部の遺構についても、この段階で未掘部分の追加調査を行っている。

以上のような経過をたどり、平成19年10月15日には現地での調査をすべて終え、機材などもすべて撤収した。その後に事業部局への現地の引き渡しを行った。

註

1）第１次調査では竪穴住居にＳＢという略称を与えていたが、凡例でも記したように、第２次調査ではＳＨという略称を与えている。

2）掘立柱建物を構成する柱穴や竪穴住居の柱穴のうち、遺物が出土したものについても、他の単独で存在するピットと通番で番号を付与している。

第Ⅱ章　位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

①遺跡の位置と地形

天道遺跡は、伊賀盆地の東北部を西へ向かって流れる柘植川の南岸に形成された河岸段丘上に位置している[1)]。柘植川は天道遺跡から500ｍほど上流で滝川と合流し、また、１㎞ほど下流で河合川と合流している。そのため、天道遺跡周辺では川沿いに沖積地や河岸段丘が広がり、小盆地状を呈している。

天道遺跡付近の柘植川南岸は台地状の地形を呈しており、主に柘植川や滝川によって形成された河岸段丘となっている。洪水の影響を受けにくく、比較的安定した地形環境であるために、古くから天道遺跡の存在する西之澤をはじめ、塚脇、金谷などいくつかの集落が展開している。天道遺跡は西之澤の集落の東端に位置しており、現在は水田などの耕地となっている。

一方、柘植川北岸については比較的広い沖積地が広がっている。当該地域の中では水田耕作に適した場所であり、主に耕地として利用されている。この沖積地の中に点在する微高地上にもいくつかの集落が点在するが、主な集落は山裾の低位段丘上を中心に営まれている。

柘植川北岸の沖積地のさらに北側には水口丘陵が広がっている。標高はそれほど高くはないが、かなりの面積を有する丘陵地帯である。この丘陵を北へと越えていくと滋賀県に入る。水口丘陵は主に古琵琶湖層群の砂岩や泥岩などで形成されているために、各所で流水の侵食によって形成された谷地形が樹枝状に発達しており、複雑に入り組んだ地形を呈している。

柘植川を遡ると、北側に鈴鹿山脈、南側に布引山地が連なっており、頂部の標高が600ｍを越える山々が伊賀盆地と伊勢湾沿岸との地理的境界をなしている。特に、布引山地の北端に位置する霊山は標高が765.8ｍもあり、古くから信仰の対象ともなってきた。ただし、鈴鹿山脈と布引山地との間には標高300ｍほどのやや低い箇所があり、加太峠と呼ばれ古くから交通の要衝となっている。

②交通

当該地域は、古くより近畿地方と東海地方とをつなぐ重要な経路となってきた。古代にはすでに伊賀を通って大和と伊勢を行き来する交通路が確立していた。壬申の乱に際しても、吉野を発った大海人皇子は西之沢付近を通って加太峠を越え、鈴鹿関へと向かったものと考えられている。

近世には、柘植川の北岸を通る大和街道が多くの人が行き交う重要な交通路となっていた。また、西之澤の集落付近には寛政元年（1789年）の年号が刻まれた道標などがあり、西之沢を通って伊勢方面や滝川流域の壬生野地区へと行き来する間道のような経路も存在していたようである。

現在では、西之澤を東西に横断するように国道25号（名阪国道）が通っており、近畿地方と東海地方とをつなぐ交通の動脈の一つとなっている。西之澤には天道遺跡から南東へ400ｍほどのところに壬生野インターチェンジが設けられており、当該地域から国道25号を通じて東西へアクセスするための玄関口となっている。

道路のほかにも、柘植川の北側には旧大和街道に沿うようにＪＲ関西本線が通っており、これも近畿地方と東海地方とをつなぐ交通網の一角を担っている。西之澤より８㎞ほど柘植川を遡った位置にあるＪＲ関西本線柘植駅からはＪＲ草津線が分岐しており、滋賀県方面へと至る経路となっている。

註

１）本節の記述にあたっては全体的に以下の文献を参照した。伊賀町役場1979『伊賀町史』、平松令三（編）1983『三重県の地名』日本歴史地名大系第24巻　平凡社

第２節　歴史的環境

①弥生時代以前

天道遺跡（A）周辺では、今のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない[1)]。縄文時代の遺跡も確認されているものは少ないが、小波田遺跡（49）ではサヌカイト製の有舌尖頭器が採集されているようであり、縄文時代早期における当該地域での人間活動の一端が窺われる[2)]。また、天道遺跡の第１次調査では縄文時代後期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡にも目立ったものは認めがたいが、天道遺跡では第１次調査において弥生時代中期中葉の土器が出土している。また、柘植川と河合川の合流地点付近に位置する北中溝遺跡（23）では弥生時代後期の竪穴住居が１棟検出されている[3)]。

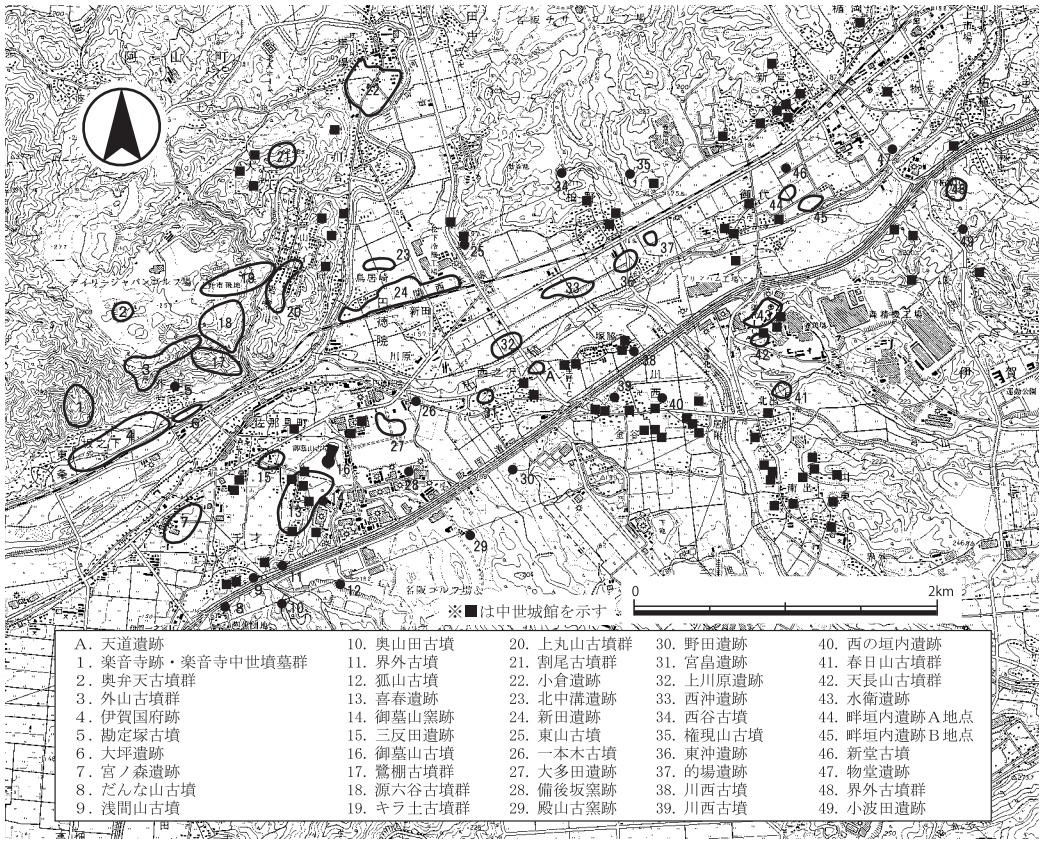
②古墳時代

古墳時代に入ると、天道遺跡周辺でも集落や古墳が目立つようになる。

古墳時代前期には、天道遺跡の対岸の丘陵尾根上に東山古墳（25）が築造されている。この古墳は古墳時代前期前半に築造されたものと考えられ、今のところ伊賀地域では最も古く位置づけられる古墳である[4)]。この古墳には銅鏡片や銅鏃、鉄斧などが副葬されており、有力な被葬者が想定される。古墳時代前期の集落としては、東山古墳が築造されている丘陵下に広がる沖積地に北中溝遺跡が存在しており、竪穴住居や溝などが検出されている。

古墳時代中期になると、天道遺跡から1.5kmほど柘植川下流の柘植川と河合川との合流地点付近に、全長約190mの大型の前方後円墳である御墓山古墳（16）が築造される[5)]。この時期の集落と思われる遺跡は天道遺跡の近隣ではほとんど確認されていないが、２kmほど柘植川を遡ったところに位置する畔垣内遺跡Ａ地点（44）では、古墳時代中期末～後期初頭頃の集落が検出されている[6)]。

古墳時代後期から終末期にかけては、伊賀盆地に



第２図　周辺主要遺跡位置図（1:50,000）

も古墳群が数多く形成されている。柘植川と河合川の合流地点の西側に広がる丘陵には多くの古墳が築造されており、キラ土古墳群（19）のように前方後円墳を含む古墳群もある。キラ土古墳群中に位置するキラ土古墳は古墳時代後期前半の全長50mの前方後円墳であり、埋葬施設からは馬具や銅鏡が出土している[7)]。

一方で、天道遺跡に近接する柘植川南岸の丘陵地では、古墳は今のところ散在的にしか確認されていない。天道遺跡の周辺の河岸段丘上にも一本木古墳（26）や川西古墳（38）などが存在しているが、消滅したものもあり、その実態については不明である。川西古墳では須恵器の平瓶が出土したとされており、時期的には天道遺跡の集落よりも新しいものであると思われる[8)]。

天道遺跡は第１次調査で古墳時代後期前半の集落であることが確認されているが、周辺では他にも柘植川の南岸に位置している西沖遺跡（33）や的場遺跡（37）で古墳時代後期前半のものと考えられる遺構が検出されている[9)10)]。また、柘植川と滝川との合流地点を見下ろす丘陵の裾部に位置する水衛遺跡（43）では古墳時代中期末～後期前半と考えられる導水施設が検出されており、注目される[11)]。

③古代

古代において、西之沢は阿拝郡に属していた。ただし、どの郷に属していたかは不明瞭である。柘植川対岸の円徳院などとともに川合郷に属していたともされる[12)]。

前述の西沖遺跡では、古墳時代の遺構のほかにも平安時代後期～鎌倉時代初頭と考えられる掘立柱建物が８棟ほど検出されている。その中には三面庇付建物の可能性が指摘されているものや、いわゆる南東隅土坑をもつものなども存在している。的場遺跡でも、平安時代後期のものと考えられる掘立柱建物群が検出されており、倉庫跡とも考えられる総柱式の建物や四面庇付の建物なども確認されている。

天道遺跡の１kmほど南の丘陵裾部では、忍冬唐草文をもつ軒平瓦などが出土している。伊賀市三田に所在する三田廃寺へ瓦を供給した瓦窯が存在しているものと推定されており、殿山古窯跡（29）と呼ばれている[13)]。また、天道遺跡の西側に位置する宮畠遺跡（31）でも忍冬唐草文をもつ軒平瓦が出土している[14)]。

また、御墓山古墳の付近には御墓山窯跡（14）が存在しており、発掘調査の結果、７世紀後半から８世紀前半にかけて須恵器や瓦塔などを生産していたことが判明している[15)]。この御墓山窯跡から１kmほど北西には伊賀国府跡（４）が存在しており、古代における当該地域の行政的中心となっていた。

④中世

伊賀盆地には古代から中世にかけて多くの荘園が存在していた。特に東大寺領が多い。また、平氏も力を持っており、西之澤のすぐ東側の地域に比定される壬生野郷付近では、鎌倉幕府成立期に至っても平氏勢力が残存していた。

こうした当該地域における活発な人の活動により、伊賀盆地には多くの中世の遺跡が残されている。集落のほかに、墓地も多く確認されている。楽音寺中世墳墓群（１）などにみられるように[16)]、墓地は丘陵尾根上に立地していることが多い。五輪塔や宝篋印塔などの石造物も多数確認されている。

また、中世城館も数多く造られた。西之澤やその付近には、狭い範囲に多数の城館が集中して存在している。天道遺跡に隣接する現在の西之澤・塚脇の集落だけでも、家喜宅跡、藤堂宅跡、今中宅跡、中林宅跡、福西宅跡、内山宅跡があげられる。南東に位置する川西の集落でも、10以上の数の中世城館の存在が確認できる[17)]。

これらの天道遺跡周辺の城館の中には、現在も土塁や堀が残されているものがいくつか存在しているが、いずれも方形単郭の小規模なものである。城というよりは、国人や地侍といった在地有力者の居宅であったものと考えられる。18世紀後半に成立したとされる『三国地誌』にその存在が記載されているものが多いが、同様にこの本に記載されているものの現在では確認できない城館もあるため、もとはさらに多数の小規模城館が当該地域に存在していたと思われる。

西之澤付近の中世城館については発掘調査が行われておらず、その造営時期についてはいずれも明ら

かではない。ただし、伊賀盆地における同様の小規模城館の発掘調査事例からみれば、その多くは戦国時代には存在していた可能性が高い。

こうした小規模城館を居宅とする多くの国人や地侍たちは連合して伊賀惣国一揆を形成し、伊賀地域を支配していた。しかしながら、戦国時代末期に二度にわたって織田信長の勢力による侵攻を受け、伊賀惣国一揆は解体していった。

⑤近世

在地連合勢力の解体後は、筒井氏の支配を経て、藤堂氏が伊賀地域を統治するようになる。検地なども行われ、西之澤付近の村落も近世的な支配体制へと組み込まれていった。伊賀市川東にある春日神社には、貞享三年（1686年）のものと思われる西之沢村の内検帳[18]が残されている。

18世紀代に編纂された藤堂藩の歴史書である『宗国史』などの史料によれば、18世紀中頃の西之沢村の戸数は64戸、人口は280人ほどであったとされている。また、江戸時代には西之沢村に藩の鉄砲射撃の練習場が置かれていたようである。

ただし、天道遺跡の第１次調査では近世の構造物の痕跡や遺物は希薄であったようであり、付近の土地については近世には耕地となっていた可能性が高いと思われる。

註

１）本節の記述にあたっては全体的に以下の文献を参照した。伊賀町役場1979『伊賀町史』、平松令三（編）1983『三重県の地名』日本歴史地名大系第24巻　平凡社、三重県2005『三重県史』資料編考古１

２）伊賀町役場1979

３）三重県埋蔵文化財センター2007『伊賀の考古資料１』研究紀要第16-3号

４）仁保晋作1992「阿山町東山古墳の遺構と遺物」『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター、石井智大2009「畿内地域周縁部における出現期古墳の築造背景－伊賀市東山古墳の再検討から－」『Mie history』vol.20　三重歴史文化研究会

５）山本雅靖1985「御墓山古墳の検討－伊賀地域における前期古墳の編年的位置をめぐって－」『考古学論集』１　考古学を学ぶ会、三重県2005

６）三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1991『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県埋蔵文化財調査報告94-1

７）福田典明・山中由紀子2005「キラ土古墳」『上野市史』考古編　伊賀市

８）伊賀町役場1979

９）三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県埋蔵文化財調査報告92-1

10）伊賀町教育委員会1978『的場遺跡発掘調査報告』伊賀町文化財調査報告２

11）三重県埋蔵文化財センター1997『水衛遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告148

12）久保文雄・和田忠臣1983「阿山郡」『三重県の地名』日本歴史地名大系第24巻　平凡社

13）三重県の古瓦刊行会1996『三重県の古瓦』、伊賀町役場1979。殿山瓦窯跡とも呼ばれている。

14）伊賀町役場1979

15）上野市教育委員会・上野市遺跡調査会1999『御墓山窯跡発掘調査報告』上野市文化財調査報告49

16）山本雅靖2008「楽音寺城跡」『三重県史』資料編考古２三重県

17）三重県教育委員会1976『三重の中世城館』三重県埋蔵文化財調査報告30、伊賀中世城館調査会1997『伊賀の中世城館』

18）奉行や代官による検地に先立って、村役人や地主の立ち会いの下に検分を行って作成された基礎台帳を指す。

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　基本層序

基本層序については、第１次調査の報告書でも報告されている。第１次調査時には地山上に４層の堆積層が確認されている。上層から、表土、赤褐色粘質土、茶褐色粘質土、黒褐色粘質土とされており、そのうち、地山直上に堆積している黒褐色粘質土の上面で古墳時代の遺構が確認されている[1)]。

第２次調査の調査区では、遺構面までに４層の堆積層が確認できた。上層から、表土（１層）、10YR 4/1褐灰色土（２層）、10YR4/2灰黄褐色土（３層）、10YR2/3黒褐色粘質土（４層）である。

現在の耕作面となっている地表面から地山面までは、およそ40㎝ほどの深さがあった。地山面は標高162.0m前後のレベルで検出されており、第１次調査区よりも地山面が30～40㎝ほど高くなっているようである。そのためか、遺構上面の削平ないしは浸食が第１次調査区で検出された遺構よりも顕著であり、ほとんどの遺構が地山面で検出された。

地山直上に堆積している４層も、削平や浸食を被ったためかごく一部でしか検出できなかったが、この土層を掘り込んで遺構が形成されている様子が認められた。したがって、４層が第１次調査の地山直上の黒褐色粘質土層と対応するものと思われる。このほかの土層についても、色調はやや異なるが、２層が赤褐色粘質土層、３層が茶褐色粘質土層にそれぞれ対応しているものと考えられる。

２層は粘質土からなる５㎝前後の比較的薄い堆積層であり、水田の床土であるとみられる。部分的に色調が変化しており、調査区北側では10YR2/2黒褐色を呈している部分もあった。３層については、やや撹拌を受けたような状況もみられ、古い耕作土ないしは耕地の造成などに伴って形成された土層である可能性も考えられる。

また、地山は2.5Y6/6明黄褐色砂礫混土や10YR6/1灰色砂礫混土からなっている。この地山層にはかなりの量の礫が含まれていたが、含まれる礫には円礫や亜円礫が多く、柘植川による堆積作用によって形成された土層であると考えられる。天道遺跡の位置する場所は柘植川にそって微高地となっており、河川の作用などによって自然堤防状の地形となっていることが窺われる。

註

１）三重県教育委員会1989『天道遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告89

第２節　検出された遺構

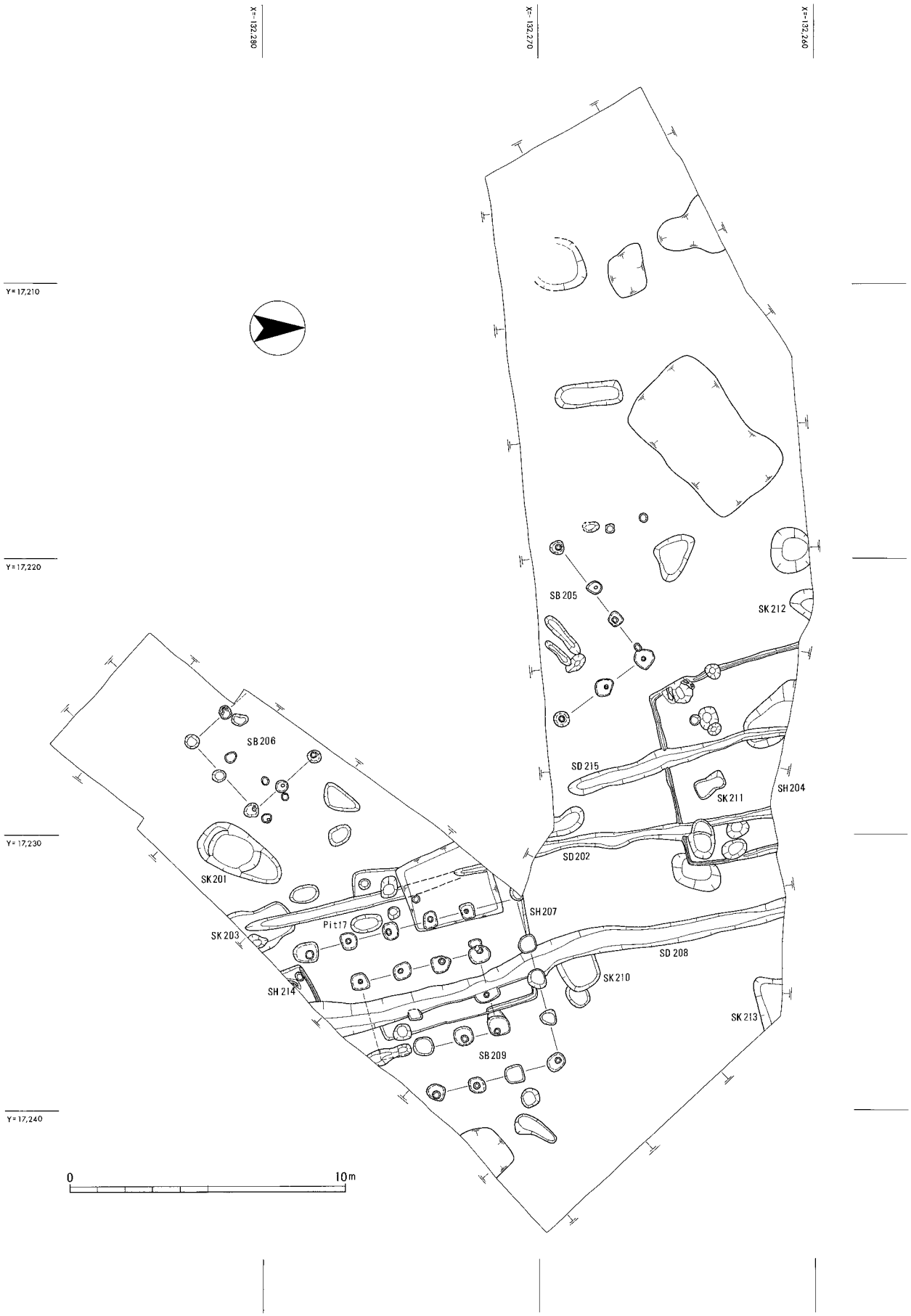
天道遺跡の今回の調査では、竪穴住居３棟、掘立柱建物３棟のほか、土坑や溝などが検出されている（第３図）。これらの遺構には古墳時代から鎌倉時代までのものが含まれている。ただし、遺構の数が少数であるために、以下では時期ごとではなく、遺構の種類ごとにまとめて述べていきたい。

①竪穴住居

ＳＨ204（第４図）　調査区北側で検出された竪穴住居である。全体の約2/3を検出しており、平面形は長方形をなすものと思われる。短辺は6.3mあり、天道遺跡で検出された竪穴住居の中では大型である。壁沿いでは壁周溝が検出された。また、床面で検出されたPit21・22などが主柱穴であると考えられる。

この竪穴住居は砂礫を多く含む地山を掘り込んで作られており、そのため掘削面にはかなりの起伏が認められた。これを緩和するために床面には貼り床が施されているようである。

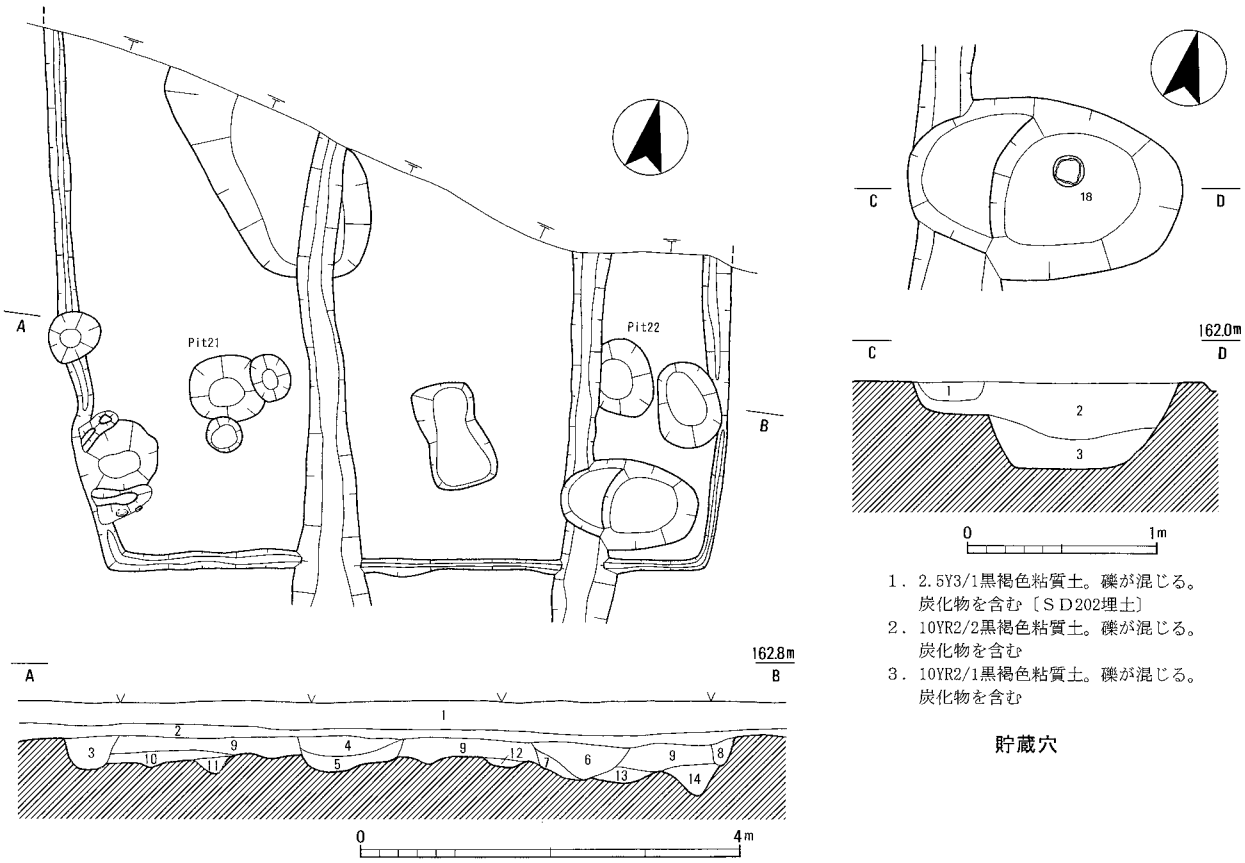
住居内西側の南隅付近には、カマドが設けられていた。遺存状態はあまりよくなかったが、南側の袖部には拳大の礫が数個入れられている様子が確認できた。土と礫とを用いてカマドを構築しているようである[1)]。



第３図　調査区全体図（1:200）

カマド内部からは土師器の甑や甕の破片がまとまって出土した。ただし、土師器の坏や須恵器の坏蓋などの破片も出土しているほか、甑（第８図７）の破片の一部は後述の貯蔵穴内からも出土しており、使用状況を示すというよりは、住居の廃絶に伴って廃棄されたものである可能性が高い。また、縄文土器片もカマド内から古墳時代の土器片とともにまとまって出土している。

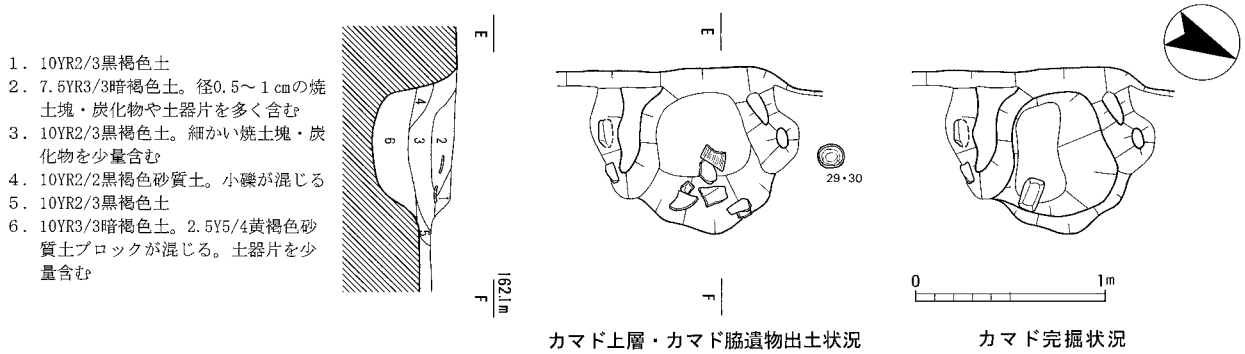
カマド内の土器片はほぼ住居の床面ほどの深さでまとまって出土したが、カマド内部はさらに深さ20cmほど掘りくぼめられている。底付近からは方柱状を呈する礫が出土しており、カマドの支脚として用い



1．2.5Y3/1黒褐色粘質土。礫が混じる。炭化物を含む〔ＳＤ202埋土〕
2．10YR2/2黒褐色粘質土。礫が混じる。炭化物を含む
3．10YR2/1黒褐色粘質土。礫が混じる。炭化物を含む

貯蔵穴

1．表土
2．10YR2/2黒褐色土
3．10YR3/1黒褐色土。径１～５cmの礫を多く含む〔土坑埋土〕
4．10YR2/3黒褐色土。10YR5/6黄褐色土ブロック含む〔ＳＤ215埋土〕
5．４層に径１～４cmの礫が多く混じる〔ＳＤ215埋土〕
6．10YR3/2黒褐色土〔ＳＤ202埋土〕
7．６層に10YR5/6黄褐色砂質土ブロックが混じる〔ＳＤ202埋土〕
8．10YR3/4暗褐色土。10YR4/6褐色砂質土が混じる〔壁周溝埋土〕
9．10YR2/3黒褐色土。径0.5～３cmの礫が混じる。土器片・炭化物を含む〔ＳＨ204埋土〕
10．10YR3/3暗褐色土。炭化物を含む〔貼り床？〕
11．10YR2/3黒褐色砂質土〔貼り床〕
12．10YR3/3暗褐色土。10YR5/6黄褐色砂質土が混じる。炭化物を含む〔貼り床？〕
13．10YR3/3暗褐色土。土器片含む〔ピット埋土〕
14．10YR3/3暗褐色土。10YR5/8黄褐色土ブロックが混じる〔ピット埋土〕



1．10YR2/3黒褐色土
2．7.5YR3/3暗褐色土。径0.5～１cmの焼土塊・炭化物や土器片を多く含む
3．10YR2/3黒褐色土。細かい焼土塊・炭化物を少量含む
4．10YR2/2黒褐色砂質土。小礫が混じる
5．10YR2/3黒褐色土
6．10YR3/3暗褐色土。2.5Y5/4黄褐色砂質土ブロックが混じる。土器片を少量含む

カマド上層・カマド脇遺物出土状況　　カマド完掘状況

第４図　ＳＨ204平面図・土層断面図（全体図1:80、その他1:40）

られていたものである可能性がある。また、カマドのすぐ北側では、完形の土師器の坏２点（第８図29・30）が重ねられた状態で出土した。

住居内の南東隅には貯蔵穴と思われる土坑が掘り込まれていた。長径1.4m、深さ0.45mほどの規模で、西側は段をなしている。この土坑の内部からは土師器の甕（第８図18）が口縁を下にして倒立した状態で出土している。検出時は底部が破損した状況であったが、周辺から出土した破片を接合した結果、ほぼ完形に復元できた。この甕のほかにも、須恵器の坏身・坏蓋・甕や、土師器の坏・甑など多くの土器がこの土坑内から出土しているが、完形近くまで復元できたものは先に述べた土師器の甕１点のみであった[2)]。こうした点からみれば、貯蔵穴出土遺物の多くは住居廃絶時に廃棄されたものであると考えられる。

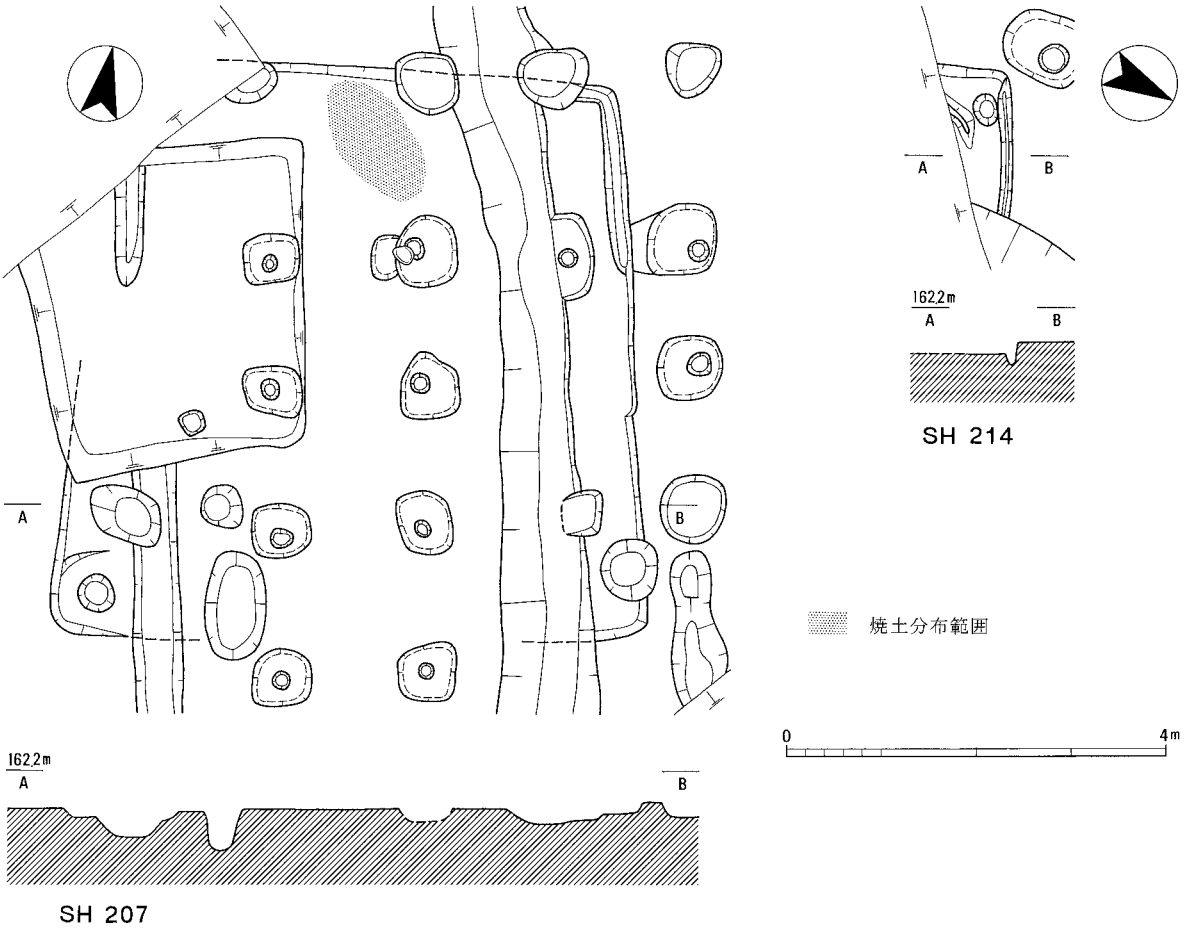
この竪穴住居は、出土遺物からみて古墳時代後期前半のものであると思われる。

ＳＨ207（第５図）　掘立柱建物ＳＢ209や、溝ＳＤ202・208と重複して検出された一辺約６ｍの平面形が正方形をなす竪穴住居である。ほぼ全体を検出したが、削平が著しく、残りのよい部分でも深さ５～10cm程度しか遺存していなかった。またＳＢ209やＳＤ202・208などの新しい時期の遺構によってかなり壊されている。

こうした遺存状況の悪さのために、細かな構造については不明な点が多い。主柱穴と思われるピットもいくつか存在するが、新しい時期の遺構の重複などのため明確ではない。ごく一部で壁周溝が確認できたものの、貯蔵穴や貼り床は確認できなかった。

また、カマド自体は遺存していなかったが、焼土や土器片が住居内北側の中央部分に集中的に分布していたことから、そこにカマドが設けられていたものと思われる。この部分からは、土師器の甕（第９図33）や甑（第９図35）などの破片がまとまって出土している。

この竪穴住居は、出土遺物からみてＳＨ204と同じく古墳時代後期前半のものであると思われる。



第５図　ＳＨ207・214平面図・断面図（1:80）

ＳＨ214（第５図）　調査区の南壁沿いで検出された竪穴住居である。大部分が調査区外に存在しており、また東側はＳＤ208によって破壊されているため、北西隅を部分的に検出したのみである。そのため、全体の規模や形態は不明である。

しかしながら、一部では壁周溝の存在が確認できた。また、検出された部分には焼土が集中的に分布しており、カマドの袖部と思われるものも調査区の壁際で部分的に検出されたため、住居内西側の北隅付近にカマドが設けられていたと考えられる。この部分からは土師器の大型高坏の脚部と思われるもの（第９図39）が出土している。

埋土中からは、ほかにも土師器の坏や甑などの破片が出土している。これらの出土遺物からみて、他の２棟の竪穴住居と同じく古墳時代後期前半の竪穴住居であると思われる。

②掘立柱建物

ＳＢ205（第６図）　ＳＨ204の西側で検出した側柱式の掘立柱建物である。棟行２間分と、桁行３間分を検出したが、かなりの部分が調査区外に存在しているため、正確な規模は不明である。ただし、それほど大きな建物になるとは考えにくい。柱間は不揃いであり、1.4～２ｍまでばらつきがある。建物の主軸はN55°Ｅである。

柱穴からは古墳時代後期の須恵器や土師器片が出土しており、古墳時代後期以降に建てられたものと考えられる。おそらく平安時代後期～鎌倉時代初頭のものと思われる。

ＳＢ206（第６図）　調査区の南西部で検出した側柱式の掘立柱建物である。棟行は２間であり、桁行は２間分を検出したが、残りの部分は調査区外に存在しているため、正確な規模は不明である。柱間はほぼ1.5ｍで揃えられている。建物の主軸はN45°Ｗで、ＳＢ205とほぼ直交する。

柱穴からは古墳時代後期の土師器片が出土しており、古墳時代後期以降に建てられたものと考えられる。ＳＢ205と同じく、おそらく平安時代後期～鎌倉時代初頭のものと思われる。

ＳＢ209（第６図）　調査区の南東部で検出した掘立柱建物である。一見すると総柱建物とも考えられるが、中心部では柱穴が存在すると推定される位置で柱穴が検出されなかった点や、側柱部分にあたる外側の柱穴がやや小型であるようにみえることなどから、ここでは庇付の側柱式掘立柱建物と推定した。棟行２間、桁行３間の建物の四面に庇が付く建物を想定しておきたい[3)]。南側の庇が存在すると思われる部分は調査区外であるため未確認であり、庇も含めた建物の全体の規模は不明である。柱間は、主屋部分も庇と思われる部分もほぼ1.5ｍに揃えられている。建物の主軸はN10°Ｗで、ほぼ南北方向に主軸をとっており、ＳＢ205・206とは主軸方向を異にする。

この掘立柱建物は遺構の重複関係からみて、ＳＨ207廃絶後に建てられたことが確認できる。複数の柱穴から古墳時代の土師器片が出土しているが、ＳＨ207のものが建築時に入り込んだものと思われる。また、ＳＤ208によって一部の柱穴が破壊されている。したがって、ＳＤ208よりは先行する遺構である。おそらく、平安時代後期～末頃のものと推定される。

③土坑

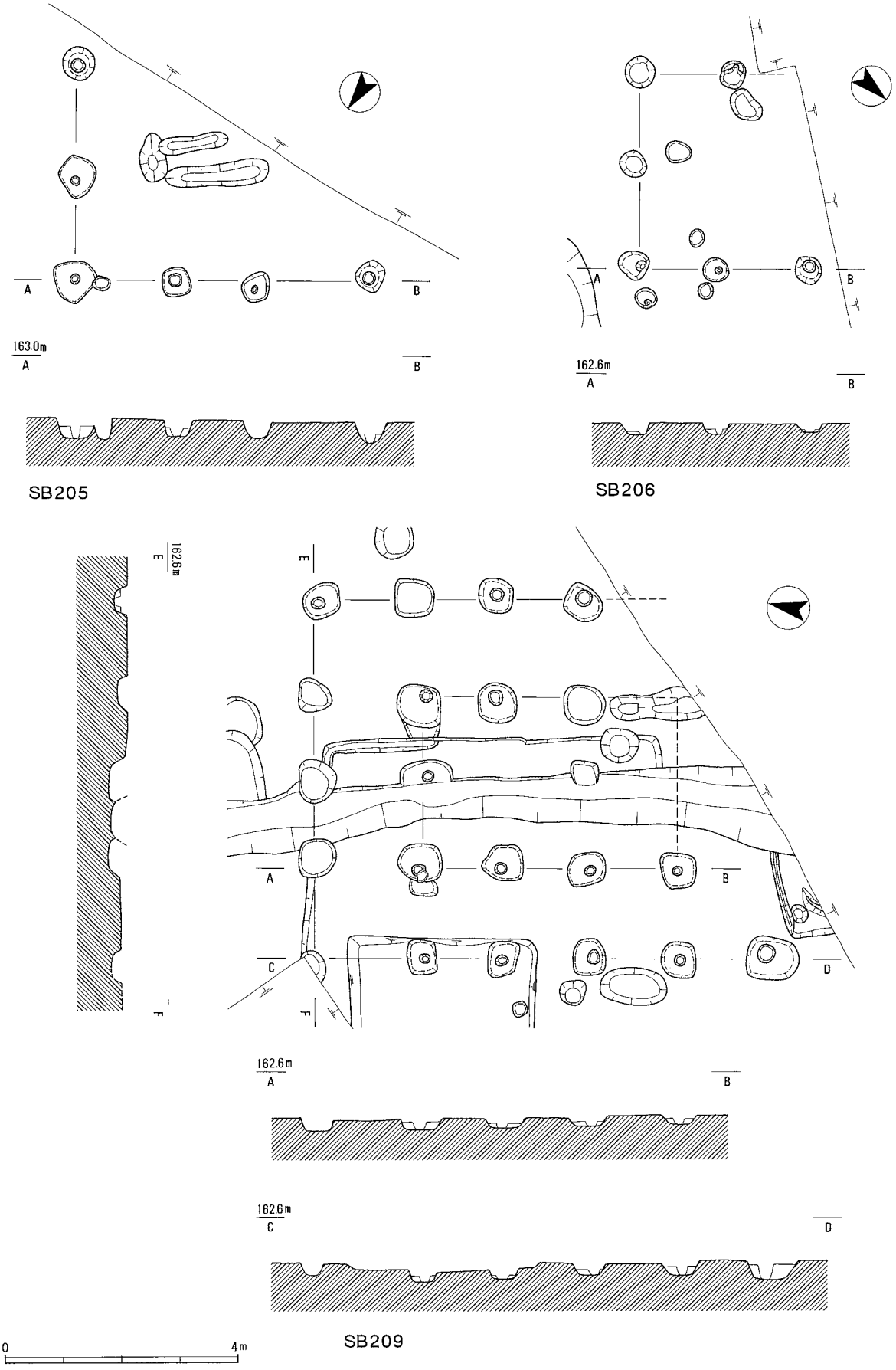
ＳＫ201（第７図）　調査区の南部で検出された長径3.3ｍ、短径1.7ｍの平面形が卵形をなす土坑である。中央部が一段深く掘られている。

埋土中からは古墳時代の土師器片が出土したが、小片で図化できるものはなかった。出土遺物からみて古墳時代後期以降のものと思われる。

ＳＫ203（第７図）　ＳＫ201の東側で検出された短径1.6ｍほどの土坑である。上部はかなり削平を受けているようで、10㎝程度の深さしか遺存していなかった。半分程度が調査区外に存在しているものと思われ、全体の形状などは不明である。ＳＤ202によって北側の一部が破壊されている。

古墳時代の須恵器や土師器の破片が出土しているが、いずれも小片である。ＳＤ202との先後関係を考えれば、古墳時代後期ないしは平安時代後期～末頃のものである可能性が高い。

ＳＫ210（第３図）　調査区の東部で検出された短径1.4ｍほどの平面形が楕円形をなす土坑である。西側がＳＤ208と重複しているが、両者の先後関係



第６図　ＳＢ205・206・209平面図・断面図（1:100）

は調査中には明らかにできなかった。

瓦器椀の破片が出土しており、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる。

ＳＫ211（第７図）　ＳＨ204と重複して検出された長径1.2m、短径0.6mの平面形が隅丸長方形の小型の土坑である。埋土中から完形の瓦器皿が１点出土している。

出土した瓦器皿からみて、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる。

ＳＫ212（第３図）　ＳＨ204のすぐ西側で検出された土坑である。半分以上が調査区外に存在しているため、全体の形状などは不明である。確認できた部分では、検出面から30cmほどの深さがあった。

埋土中から土器片と思われる細片が出土しているのみで、時期は不明である。

ＳＫ213（第３図）　調査区の北東隅で検出された土坑である。大部分が調査区外に存在しているため、全体の形状などは不明である。ただし、検出された部分からみてかなり大型の土坑になる可能性がある。確認できた部分では、検出面から20cmほどの深さがあった。

埋土中から古墳時代後期の土師器片が出土しており、古墳時代後期以降のものと思われる。

④溝

ＳＤ202（第３図）　調査区を南北に横断する幅0.5mほどの直線的な細い溝である。両端は調査区外へのびているために、全体の長さは不明である。深さは最も深い場所で20cmほどある。ＳＨ204を一部破壊して掘り込まれている。

出土した遺物の量は少ないが、土師器小皿などが出土している。これらの出土遺物からみて平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる。

ＳＤ208（第３図）　ＳＤ202と同じく調査区を南北に横断する幅1.1mほどの直線的な溝である。両端は調査区外へのびているために、全体の長さは不明である。ＳＨ207およびＳＢ209を一部破壊して掘り込まれている。

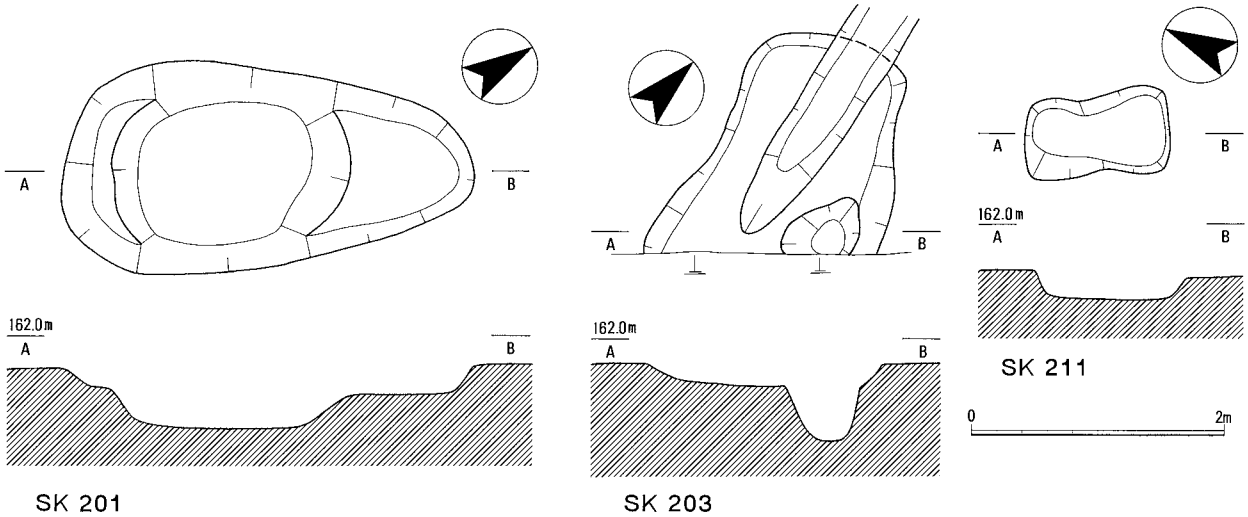
瓦器片などが出土していることから、平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる。また、埋土中からは古墳時代の須恵器や土師器も出土しているが、もとはＳＨ207の埋土中に含まれていた遺物などが混じった可能性が考えられる。

ＳＤ215（第３図）　ＳＤ202の西側で検出された溝である。ＳＤ202にほぼ平行し、やはりＳＨ204を一部破壊して掘り込まれている。調査区中央部の未掘部分で途切れているようで、調査区南側では続きが検出されていない。

この溝からは遺物が全く出土しなかったために時期は不明であるが、位置関係などからみてＳＤ202と同じく平安時代末～鎌倉時代初頭のものと推定される。

註

1）第１次調査においても、カマドの構築に礫が用いられている例が確認されている。



第７図　ＳＫ201・203・211平面図・断面図（1:60）

２）この甕についても口縁部の一部はもとから欠損していた可能性が高い。

３）このような建物を想定した場合、ＳＨ214とＳＤ208の接点付近にも庇の柱穴が存在するはずであるが、調査においては確認できなかった。そのため、ＳＨ214北西隅に接して存在するやや大型のピットは別の構造物に伴う遺構の可能性もある。そうみた場合には、南側を除く三面庇付の建物、もしくは四面庇付の棟行２間、桁行２間の建物なども復元案として考えられるかもしれない。

第３節　出土遺物

①竪穴住居出土遺物

ＳＨ204出土遺物（１～32）　カマド内出土遺物と貯蔵穴内出土遺物、柱穴内出土遺物、それ以外の遺物に分けて述べていきたい。

１～７はカマド内から出土した遺物である。

１・２は縄文土器である。１は小片であるが、外面に撚糸文が施されている。２は深鉢の底部片と思われる。底部外面に網代圧痕が残る。いずれも縄文時代後期のものと思われる。この他にもカマド内からは数片の縄文土器片が出土している。３は須恵器の坏蓋である。天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもつ。口縁端部には段が認められる。４～７は土師器である。４・５は坏で、４は器高が低く浅いものである。６は甕で口縁端部を若干上方にはね上げる。体部は内外面ともナデで調整されていると思われる。７は甑である。やや扁平な把手をもち、外面はハケ、内面はハケおよび工具ナデにより調整されている。この甑は同一個体の破片が貯蔵穴内からも出土している。

８～20は住居内の南東隅で検出された貯蔵穴と考えられる土坑内から出土した遺物である。

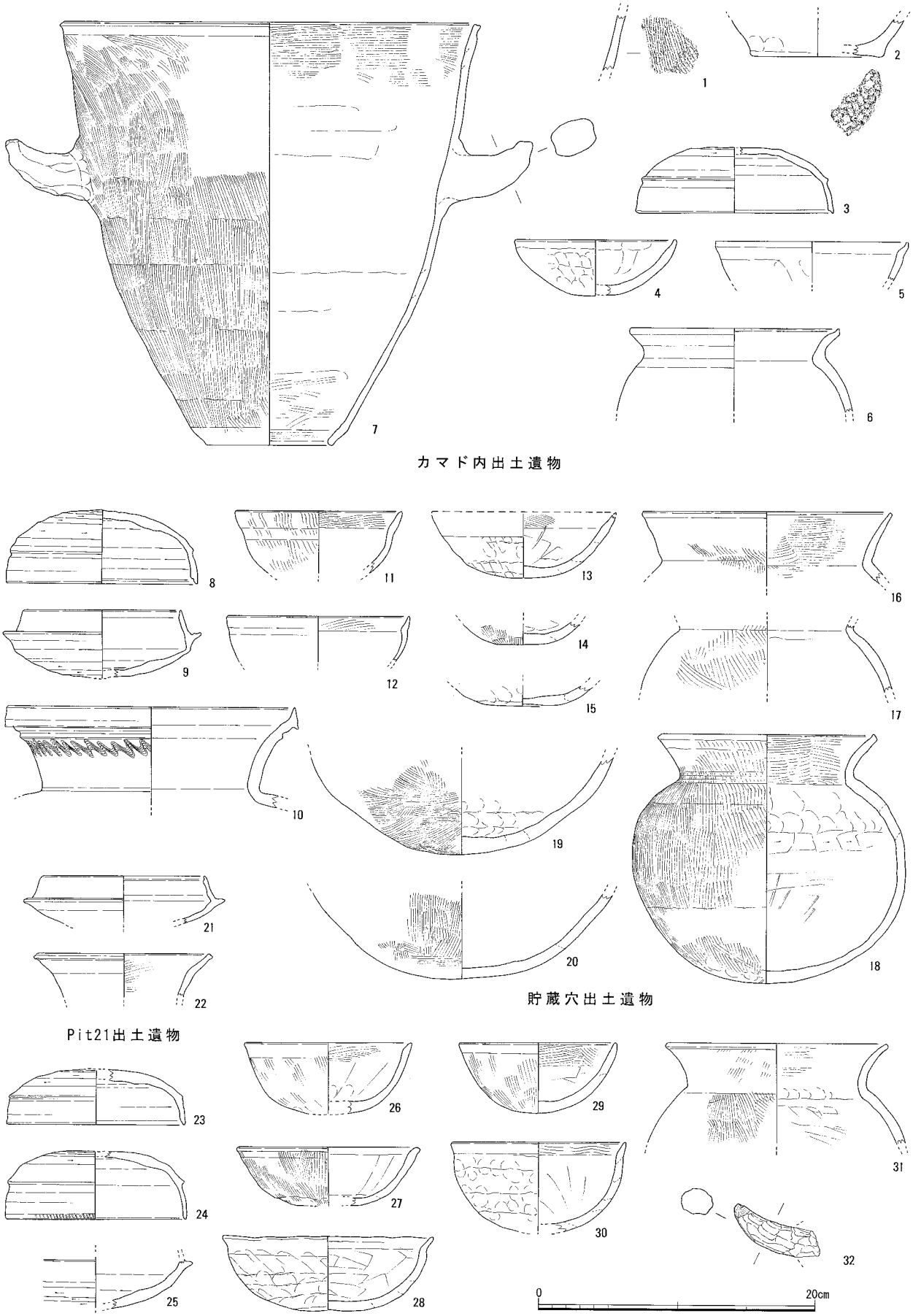
８～10は須恵器である。８は坏蓋で、口縁部と天井部の境の稜は明瞭である。口縁端部には段をもつ。９は坏身である。たちあがりは高く、口縁端部に斜めの面が認められる。８の坏蓋とは焼成などが異なり、組み合うものかどうかは不明である。10は甕の口縁部である。外面には波状文が施されている。11～20は土師器である。11～15は坏で、外面がハケによって調整されているものと、ナデで調整されているものとがある。11や13は内面が工具ナデによって調整されている。14の内面にはベンガラと思われる赤色顔料が全体的に薄く付着している。外面には赤色顔料やススの付着は認められない。15は器面の調整などからみて壺の底部の可能性もある。16～20は甕である。いずれも外面はハケで調整され、内面は工具によるナデやケズリ、ユビオサエなどによって調整されている。18は貯蔵穴の底に倒立状態で置かれていた、ほぼ完形に復元できたものである。体部は球形をなす。体部上半の外面にはススが付着している。19・20は18よりも大型の甕の底部であり、器壁も分厚い。20の底部外面には、不明瞭ながら×印のヘラ記号のような痕跡が認められる。

21・22はＳＨ204の主柱穴と考えられるPit21から出土した遺物である。

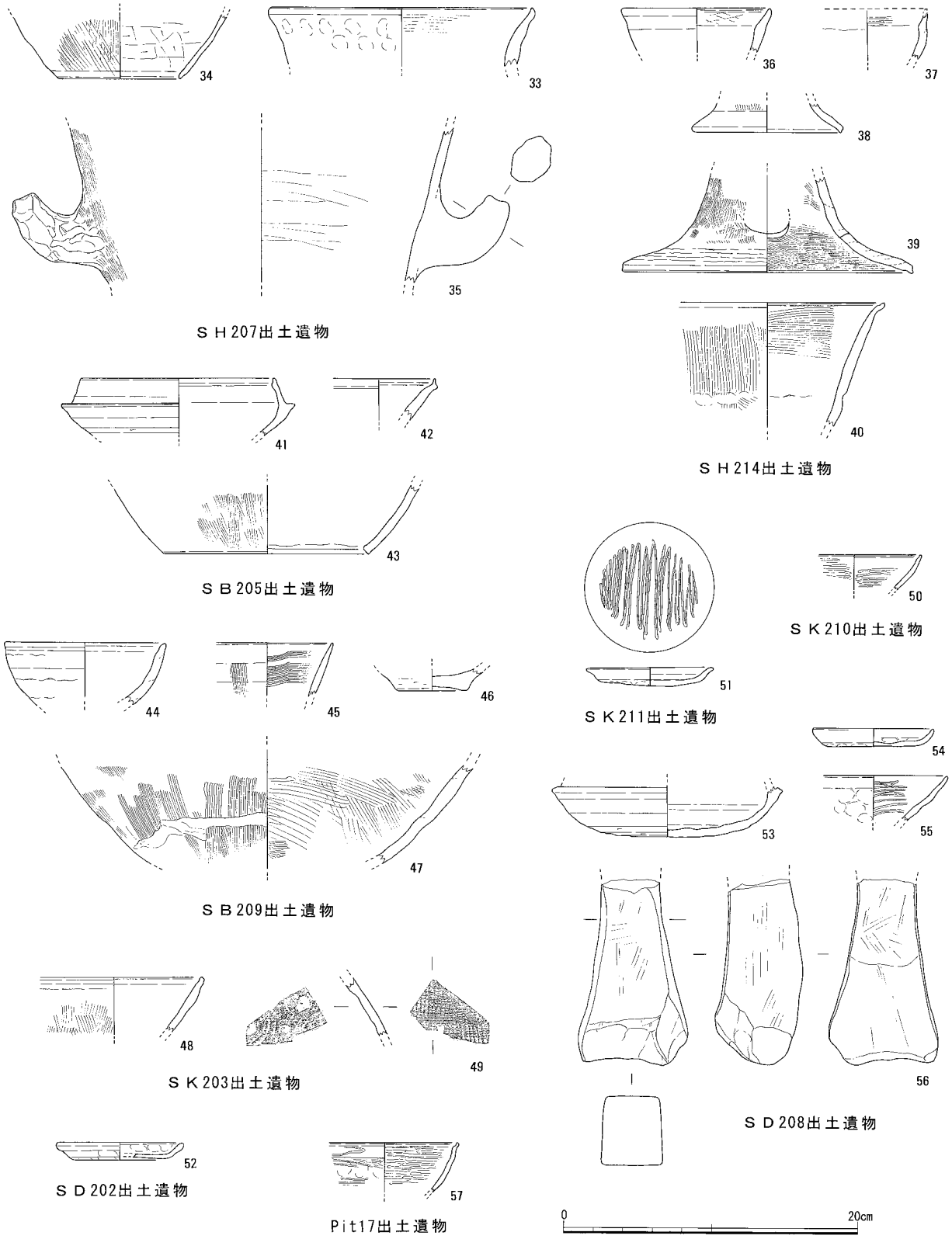
21は須恵器坏身で、たちあがりは高い。口縁端部に段をもつ。22は土師器の壺と思われる。小片であるため、ほかの器種の可能性もある。口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。内面はハケによって調整されている。

23～32は、カマドや貯蔵穴、柱穴以外から出土した遺物である。カマド周辺の埋土中から出土したものが多い。

23～25は須恵器である。23・24は坏蓋で、いずれも口縁部と天井部の境の稜は明瞭である。24は口縁端部を丸く収める。口縁端部の外面には連続した刻み目状の痕跡が認められる。25は坏身の小片である。このほか、小片のために図化できなかったものの、甕の破片も出土している。26～32は土師器である。26～30は坏である。外面をハケで調整するものとナデで調整するものとがあるが、30などは外面のナデが粗く、粘土接合痕が明瞭に残る。27は器形からみて高坏の坏部の可能性もある。なお、29・30はカマドの脇から重ねられた状態で出土した。30の底部には、焼成後に穿孔されたと思われる孔があけられている。31は甕である。口縁部は外湾しており、頸部の屈曲は緩やかである。32は甕の把手であると思われる。甑の把手に比べて細く、焼成も堅緻である。



第８図　ＳＨ204出土遺物実測図（1:4）



第９図　ＳＨ207・214、ＳＢ205・209、ＳＫ203・210・211、ＳＤ202・208、Pit17出土遺物実測図（1:4）

なお、この把手は貼り床の可能性がある土層中から出土したものである。

これらの遺物は、縄文土器を除けば、いずれも古墳時代後期前半のものと思われる。須恵器にはＭＴ15型式に相当する特徴を持つものが多い。

ＳＨ207出土遺物（33～35）　33～35は土師器である。33は甕の口縁部である。外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。34・35は甑である。この２点は同一個体の可能性もある。34は底部の破片で、外面はハケ、内面はケズリによって調整されている。器壁は比較的薄い。35は把手付近の破片で、外面はハケによって調整されている。

以上の遺物のうち、33・35はカマドの痕跡と思われる焼土集中部の周辺から出土した。これらの遺物はいずれも古墳時代後期のものと思われる。

ＳＨ214出土遺物（36～40）　36～40は土師器である。36・37は坏の小片で、両者とも外面はナデによって調整されている。36はやや小型のものである。38は高坏の脚部と考えられる。外面には一部にハケと思われる痕跡が認められる。39も高坏の脚部であると考えられるものである。ただし、脚裾部の直径が20㎝近くもある大型のもので、円形の透孔をもつという、やや特殊なものである。透孔は１箇所しか残存していないが、おそらく２方向ないしは３方向にあけられていたものと推定される。内外面ともハケによって調整されているが、外面の調整は比較的粗く、脚裾部付近には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。また、内面にはスス状の黒色物質が薄く付着している。カマドと思われる焼土集中部付近から出土している。40は甑の口縁部片である。口縁端部は外方へつまみ出されている。

これらの遺物はいずれも古墳時代後期のものと思われる。

②掘立柱建物出土遺物

ＳＢ205出土遺物（41～43）　41は須恵器の坏身である。たちあがりはやや高く、口縁端部には斜めの面が認められる。ＭＴ15型式に相当するものと思われる。42・43は土師器である。42は甕の口縁部片と思われるものである。口縁端部は上方へ強くはね上げられ、明瞭な面を持つ。また、外面は赤色を呈しており、スリップが施されている可能性もある。甕ではなく、壺または高坏の破片とも考えられる。43は甑の底部片で、外面はハケ、内面はナデによって調整されている。

これらの遺物はいずれも古墳時代後期のものと思われる。

ＳＢ209出土遺物（44～47）　44～47は土師器である。44は坏である。作りは比較的粗く、外面には粘土接合痕が明瞭に残る。45は直口壺の口縁部片である。口縁端部は丸く収められる。内外面ともにハケによって調整されている。46は壺の底部であると思われる。胎土に砂粒を多く含み、ほかの古墳時代後期の土器の胎土とはやや異なる。外面には横方向にヘラケズリ状の調整が施されている。47は甕の体部片である。内外面ともハケによって調整されているが、外面のハケは部分的である。また、外面にはハケが施された後につけられた横方向のナデ状の痕跡が認められる。

46については弥生土器または古墳時代前期～中期の土師器である可能性もあるが、そのほかの遺物はいずれも古墳時代後期のものと思われる。

③土坑出土遺物

ＳＫ203出土遺物（48・49）　48は土師器である。直線的に外方へひらくようであるが、小片であるために器種は不明である。内面はナデで丁寧に調整されている。外面はハケによって調整されている。高坏ないしは鉢の口縁部片であろうか。49は須恵器の甕の体部片である。器壁の厚さなどからみて、大型の広口壺である可能性もある。外面には擬格子状のタタキの後にカキメが施されている。内面には同心円状の当て具痕が残る。

これらの遺物はいずれも小片であるために時期を推定しにくいが、おそらく古墳時代後期のものと思われる。

ＳＫ210出土遺物（50）　50は瓦器椀の口縁部片である。内外面にミガキが施されているが、外面のミガキは粗い。口縁端部内面には浅い沈線状の段がめぐらされている。平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる[1)]。

ＳＫ211出土遺物（51）　51は瓦器皿である。ほぼ

完形で、口縁部径は8.6cmある。見込み中央部にはジグザグ状の暗文が施されている。口縁部付近には内外面ともにヨコナデが施されており、口縁部は外方へひらく。平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる。

④溝出土遺物

ＳＤ202出土遺物（52）　52は土師器の小皿である。口縁部は平らな底部から明瞭に屈曲し、斜め外方へ立ち上がる。全体にユビオサエの痕跡が残るが、口縁部の内外面はヨコナデによって調整されている。平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる[2)]。

ＳＤ208出土遺物（53～56）　53は須恵器の坏身である。底部外面に一本線のヘラ記号が認められる。54は土師器の小皿である。底部と口縁部との境は緩やかに屈曲する。口縁端部は丸く収められる。底部内外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残るが、口縁部の内外面はヨコナデによって調整されている。55は瓦器椀の口縁部片である。外面にはミガキは認められない。口縁端部は丸く収められる。56は砥石である。方柱状で４面の砥面をもつ。目はやや粗い。各砥面には、部分的に薄い擦痕状の使用痕が認められる。石材は硬質の砂岩と思われる。

53は古墳時代後期前半のものである。ＭＴ15型式～ＴＫ10型式古段階に相当するものであろう。砥石についても、形態からみて古墳時代のものである可能性もある。一方、54・55は平安時代末～鎌倉時代初頭のものと考えられる[3)]。

⑤ピット出土遺物

Pit17出土遺物（57）　57は瓦器椀である。内外面にミガキが施されているが、外面のミガキは粗い。口縁端部の内面には沈線状の段がめぐらされている。おそらく平安時代末～鎌倉時代初頭のものと思われる。

註

1）伊賀地域の瓦器の詳細な暦年代を推定することは難しいが、およそ12世紀代のものと考えられる。12世紀代でも後半に属する可能性が高いものと思われる。ＳＫ211出土の瓦器皿や、Pit17出土の瓦器椀も同様である。なお、伊賀地域の瓦器の編年や暦年代観については以下の文献を参照した。

山田猛1986「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　日本中世土器研究会、福田典明2006「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』ＸＸ　日本中世土器研究会

2）器形や調整などからみて、およそ12世紀後半頃のものと思われる。ＳＤ208出土の土師器小皿も同様である。伊賀地域の中世土師器の編年や暦年代観については以下の文献を参照した。

倉田直純1990「２．浮田遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県埋蔵文化財調査報告92-1　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、森川常厚2008「伊賀地域の中世土器」『三重県史』資料編考古２　三重県

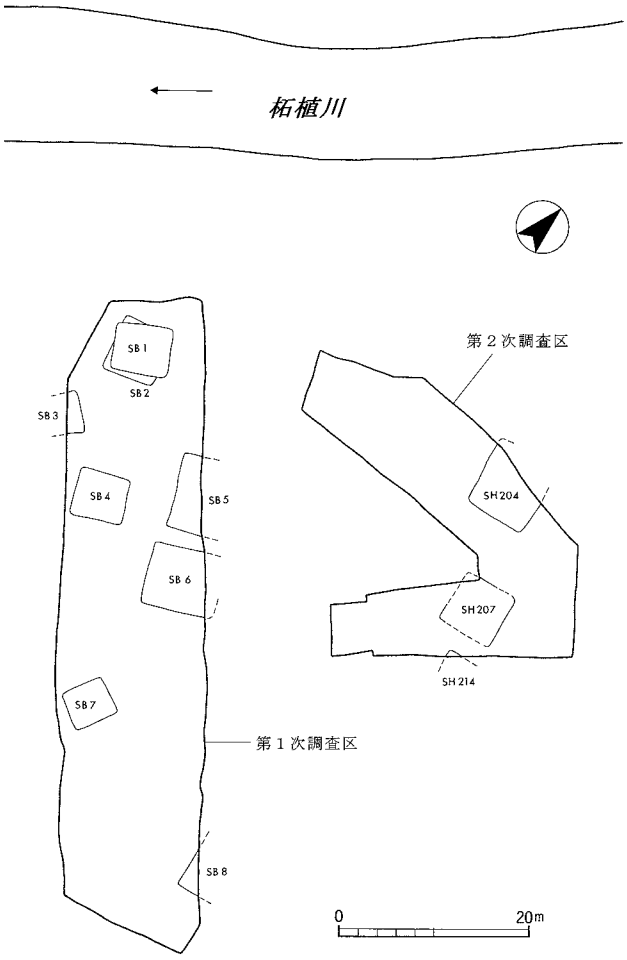
3）55については、外面にミガキがみられない点や、口縁端部に沈線状の段が認められず丸く収められている点、器高がやや低くなっていると思われる点などは、ＳＫ210やPit17から出土した瓦器椀より新しい要素であると思われる。ただし、暦年代としてはやはり12世紀後半あたりに位置づけることができよう。

第Ⅳ章　調査のまとめ

第１節　古墳時代後期集落の様相

天道遺跡では、第１次調査で検出されたものと合わせれば、11棟の古墳時代後期の竪穴住居が確認されている（第10図）。遺跡の全体を調査したわけではないため、全体像はいまだ明確ではない。しかしながら、調査を行った範囲では後世の削平などによって完全に失われた遺構は少ないとみられるため、集落の様相はある程度把握できるといえよう。

集落の存続期間　天道遺跡の古墳時代集落の存続期間は、出土した須恵器からみてＭＴ15型式期～ＴＫ10型式期古段階であると考えられる[1)]。６世紀前半頃におよそ20～40年ほどの期間営まれた集落であったと推定される。



第10図　古墳時代竪穴住居分布図（1:800）

存続期間がそれほど長くないためか、住居の重複は少ない。重複が明確に確認できるのはＳＢ１とＳＢ２のみである。先行するＳＢ２についてはＭＴ15型式期、後出のＳＢ１についてはＴＫ10型式期古段階であり、ほぼ集落の形成から解体までの間に１回程度の建て替えがなされていると推測される。

このほかＳＢ５とＳＢ６、ＳＨ207とＳＨ214は非常に近接しており、同時併存が考えにくい。これらについても、集落の存続期間の中で１回程度の建て替えが行われた可能性があろう。

集落の様相　掘立柱建物については時期の比定が難しいが、次節で述べるように、いずれも古墳時代より後の時期のものと思われる。現状では主に竪穴住居で構成される居住域であった可能性が高いと思われる。

竪穴住居は、分布状況からみるといくつかの群を形成しているようである。大きくみれば、第１次調査区のＳＢ１～７が一つのまとまりをなし（Ａ群）、そして第２次調査区のＳＨ204・207・214が一つのまとまりをなすように思われる（Ｂ群）。ＳＢ８はこれらとまた別の群に属すのか、あるいはＳＨ204・207・214などと同じＢ群に連なるのかは現状では明確ではない。ただし、建て替えを考慮すれば、いずれの群においても同時に存在した竪穴住居数はごく少数であったものとみられる。

時期別にみると、ＭＴ15型式期の竪穴住居はＡ群・Ｂ群どちらにも存在する。したがって、こうした竪穴住居のまとまりは集落成立時から形成され始めていたことが窺われる。次の段階のＴＫ10型式期古段階の竪穴住居としてはＳＢ１・４・６・７などがあげられ、Ａ群に集中するようにみえるが、Ｂ群のＳＨ207・214の時期が絞り込めないため、ＴＫ10型式期に集落の構造に変化があったかどうかは明らかではない。

また、竪穴住居に規模の大小があることも注意される。ＳＢ５・６、ＳＨ204などは一辺が７～８ｍ

ほどあるが、ＳＢ３・７などは一辺４～５ｍほどしかない。こうした規模の差がどのような差異に基づくものかは不明であるが、出土遺物からは竪穴住居間の格差は見いだしがたい。ただし、特に規模が小さい住居であるＳＢ３とＳＢ７のみが他の竪穴住居とは主軸方向を異にしている点は注意されよう。

伊賀盆地の集落動態との関係　以上に述べてきたような天道遺跡の様相と似た様相を示す遺跡が、伊賀盆地においていくつか調査されている。

天道遺跡と同じ柘植川流域では、大多田遺跡があげられる[2)]。天道遺跡と同じくいくつかの竪穴住居群から構成される集落である。存続期間もＭＴ15型式期～ＴＫ10型式期新段階とみられ、天道遺跡とほぼ同時期に営まれた集落である。

柘植川流域以外では、比自岐川流域の馬場西遺跡があげられる[3)]。馬場西遺跡も竪穴住居からなる集落であり、ＴＫ47型式期～ＴＫ10型式期古段階に営まれたと想定される。立地からみても、河川の南岸の丘陵北裾の河岸段丘上に位置している点は天道遺跡と共通性をもつといえよう。集落の形成時期については天道遺跡の集落より若干遡る可能性があるが、集落の存続期間や立地など、共通点が多いことは注意される。

伊賀盆地のその他の遺跡についても、ＴＫ47型式期～ＭＴ15型式期に形成され、ＴＫ10型式期新段階に入るころに解体する集落と推定される遺跡がいくつかみられる。

明瞭なものではないかもしれないが、大きくみると、伊賀盆地における古墳時代集落の形成や解体の画期が、ＴＫ47型式期～ＭＴ15型式期と、ＴＫ10型式期新段階あたりに見いだされる可能性があろう。柘植川流域に存在する畔垣内遺跡のように、ＴＫ47型式期に集落が形成され、ＭＴ15型式期まで続かずに解体する集落の存在も、当該期における集落動態の画期と関係するものかもしれない[4)]。

伊賀地域における古墳時代社会の動向を考える上では、古墳の様相だけではなく、こうした集落の存続期間などについても注意しておかねばならないであろう。

註

1）第１次調査のＳＢ３はＴＫ43型式期まで時期的に下る可能性が指摘されているが、出土している須恵器はＴＫ10型式期の範疇に収まると考えても問題ないように思われる。

2）上野市教育委員会・上野市遺跡調査会1993『大多田遺跡発掘調査報告（２次）』上野市文化財調査報告42、上野市教育委員会・上野市遺跡調査会1998『堂垣内・大多田遺跡発掘調査報告』上野市文化財調査報告52

3）三重県教育委員会1978『上野市比自岐　馬場西遺跡』昭和52年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告２

4）三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1991『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県埋蔵文化財調査報告94-1

第２節　平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺構について

古墳時代より後の時期の遺構としては、掘立柱建物３棟のほか、溝や土坑が検出された。

遺構の時期　これらの遺構の詳細な時期については、出土遺物が少ないために不明な部分も多い。

ただし、少数ながら出土している瓦器によってみてみると、ＳＫ211から出土した瓦器皿は口縁部内面がミガキではなく、ヨコナデによって調整されている。したがって、12世紀後半に位置づけることができよう[1)]。

ＳＫ210やPit17から出土している瓦器椀についても、外面のミガキの粗雑化の様相などからみて、ほぼ同時期に位置づけられる。ＳＤ208出土の瓦器椀は他の瓦器椀に比べてやや新しい様相を示すが、やはり12世紀後半あたりに位置づけることが可能である。ＳＤ202やＳＤ208から出土した土師器小皿なども同時期のものであろう。第１次調査でもこの時期の遺構・遺物が検出されている。

以上の点からみて、天道遺跡第２次調査で検出された溝や土坑は、12世紀後半を中心とする時期のものであると考えられる。

一方で、掘立柱建物については３棟とも柱穴から古墳時代の遺物のみが出土している。ただし、柱穴埋土からはかなり多くの土器の破片が出土していることが注意される。竪穴住居群の存続期間内に地表

面にこうした土器片が多数散乱しており、それが柱穴埋土に混じり込むとは若干考えにくいのではなかろうか。やはり、竪穴住居群の廃絶後に柱穴が掘られたと考えた方がよいように思われる。

少なくとも、ＳＢ209についてはＳＨ207との重複関係からみてＳＨ207より後に建てられたものであり、さらに、近接する状況からみてＳＨ214との併存も考えがたい。したがって、やはりＳＢ209は竪穴住居群に後出するのであり、古墳時代後期後半～平安時代末までの時期幅の中に収まるものと考えるのが妥当であろう。ここからさらに時期を絞り込む根拠には乏しいが、今回の調査では古墳時代後期後半～平安時代前期の遺物が出土していないことを考えると、平安時代後期以降のものである可能性が高い。庇付建物と考えられることや、柱穴が不整形でそれほど大型ではないことなどの形態的な特徴や、主軸方向が平安時代末～鎌倉時代初頭の溝と一致することなどを考えても、やはり平安時代後期～末あたりの時期が想定できるのではなかろうか。

ＳＢ205とＳＢ206の２棟は、位置関係や主軸方向、柱穴の形態の類似性などからみて、同時期に併存していた可能性が高い。これらについても時期は不明であるが、柱間の長さや柱穴からの遺物の出土状況などをふまえれば、ＳＢ209と近い時期を考えておくことが適当であろう。

存続時期　このように、天道遺跡の古墳時代のもの以外の遺構は、平安時代後期～鎌倉時代初頭に属するものと考えられる。先にも述べたように、今のところ奈良時代や平安時代前期の遺構・遺物はほとんど確認されておらず、空白期となっている。したがって、平安時代後期から再び当遺跡周辺での活動が活発化したことが窺われる。そして、鎌倉時代初頭より後の時期の遺構・遺物もほとんど確認されていないことから、この時期以降、天道遺跡周辺に人が居住した痕跡は薄いといえよう。

鎌倉時代初頭以降に天道遺跡周辺の土地がどのように利用されていたかという点で注意されるのが、ＳＤ202・208・215である。これらの溝は、天道遺跡で確認できる遺構の中では最も時期が下ると思われる遺構である。検出した範囲ではほぼ南北方向にのびているが、これは第１次調査が行われた当時の耕地境界の畔の方向とほぼ一致している[2)]。この畔方向との一致性を積極的に評価すれば、この溝群が形成された鎌倉時代初頭前後の時期に周辺の土地が耕地化された可能性が考えられよう。そして、この想定に基づけば、近年までみられた地割りについても、この時期に成立したものと推測される。

なお、柘植川を挟んで対岸に位置する西沖遺跡や的場遺跡でも、天道遺跡と同様に平安時代後期～鎌倉時代初頭にかけての時期に人間の活動が盛行する様子を見て取ることができる[3)]。

この時期の伊賀地域では、数多く存在する荘園をめぐって複雑な勢力争いが行われていた。比較的短期間のうちに、平家勢力の伸張や没落、寺院勢力による荘園の奪回、鎌倉幕府による地頭の配置など、さまざまな動きがあった。こうした動きは、天道遺跡が所在する地域にも密接に関わっている[4)]。天道遺跡やその他の近隣の遺跡でみられるような集落の消長は、こうした社会的な動向の一部と関係している可能性も考えられよう。

註

１）伊賀地域における瓦器の編年と暦年代観については以下の文献を参考にした。
山田猛1986「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　日本中世土器研究会、福田典明2006「伊賀地域における瓦器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』ＸＸ　日本中世土器研究会

２）第１次調査が行われた後に区画整理が行われたようである。現在の耕地の地割りは新設の県道に沿う形となっており、過去の地割りとは異なっている。古い地割りは伊賀町都市計画図等で確認できる。

３）三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県埋蔵文化財調査報告92-1、伊賀町教育委員会1978『的場遺跡発掘調査報告』伊賀町文化財調査報告２

４）伊賀町役場1979『伊賀町史』

第３節　結語

今回の天道遺跡第２次調査では、主に古墳時代後期前半と平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺構・遺物が検出された。

伊賀盆地には古墳時代後期に数多くの古墳が築造されている。柘植川流域にも、奥弁天古墳群やキラ土古墳群、鷺棚古墳群など、多数の古墳群が形成されている。これらの古墳群における発掘調査も多数行われており、馬具が出土したキラ土古墳[1)]や、トンボ玉が出土した奥弁天４号墳[2)]など、注目されるものも多い。

一方で、それらの古墳の被葬者や築造に関わった人々が居住していた集落も、当然ながら多く存在したことであろう。しかし、そうした古墳時代集落の様相については、まだまだ明らかになってきているとは言いがたい状況である。これは、古墳の発掘調査に注目が集まりがちであることや、集落の具体像が分かる発掘調査事例が少ないことに起因するものと思われる。

こうした状況の中にあって、今回の天道遺跡の調査成果は、６世紀前半頃にあたる古墳時代後期前半の集落の様相や動態を知る上で、第１次調査の成果と合わせて比較的まとまった資料を提供することができたといえる。伊賀盆地における古墳時代後期の集落について考える上で、基礎的な資料の一つとなるであろう。

また、平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺構の検出も注目される。第１次調査ではこの時期の遺構は土坑ＳＫ10がみられた程度であったが、今回は平安時代後期～鎌倉時代初頭のものとみられる掘立柱建物や溝、土坑など複数の遺構が検出されたことから、当該期の集落域が今回の調査区の東側から南側にかけて広がっている可能性が考えられる。

この集落は鎌倉時代初頭には途絶えていくことが調査によって判明してきた。つまり、中世から現在まで連綿と続く周辺の集落が成立する前の段階で消えていくのである。この集落動態については、前節では広域的な社会的な動きとあわせてみてきたが、他方では、天道遺跡近辺の現存集落の歴史をたどる上でも一つの手がかりとなりうる遺跡と考えられるのかもしれない。

天道遺跡の第２次調査は短期間であったこともあり、残念ながら調査自体には十分であったとは言いがたい部分もある。しかしながら、以上に述べてきたように、伊賀盆地における古墳時代後期や平安時代後期～鎌倉時代の集落や社会について明らかにする上で、重要な成果をあげることができたといえるであろう。今後、これらの成果が当該地域における歴史像をより豊かなものにするために活用されることを願いたい。

註

１）福田典明・山中由紀子2005「キラ土古墳」『上野市史』考古編　伊賀市

２）阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会1989『奥弁天４号古墳・源六谷１号古墳』阿山町埋蔵文化財調査報告第２集

遺構名	種別	時期	長さ・長径（m）	幅・短径（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
ＳＨ204	竪穴住居	古墳時代後期	5.8～	6.3	0.2	縄文土器・須恵器・土師器	西側にカマド・南東隅に貯蔵穴
ＳＨ207	竪穴住居	古墳時代後期	6.0	5.8	0.1	須恵器・土師器	北側にカマド
ＳＨ214	竪穴住居	古墳時代後期	1.6～	—	0.15	須恵器・土師器	西側にカマド
ＳＢ205	掘立柱建物	平安時代後期～鎌倉時代初頭	5.1？	3.7？	—	須恵器・土師器	側柱式
ＳＢ206	掘立柱建物	平安時代後期～鎌倉時代初頭	2.9～	3.5	—	土師器	側柱式
ＳＢ209	掘立柱建物	平安時代後期～鎌倉時代初頭	7.8？	6.2	—	土師器	側柱式・四面庇もしくは三面庇・総柱式の可能性もあり
ＳＫ201	土坑	古墳時代後期？	3.3	1.7	0.45	土師器	
ＳＫ203	土坑	古墳時代後期？	2.2～	1.6	0.12	須恵器・土師器	平安時代後期の可能性もあり
ＳＫ210	土坑	平安時代末～鎌倉時代初頭	1.2～	1.4	0.18	瓦器	
ＳＫ211	土坑	平安時代末～鎌倉時代初頭	1.2	0.6	0.25	土師器・瓦器	
ＳＫ212	土坑	不明	1.1～	1.0～	0.3	—	
ＳＫ213	土坑	古墳時代後期？	1.6～	1.1～	0.2	土師器	
ＳＤ202	溝	平安時代末～鎌倉時代初頭	19.4～	0.5	0.2	土師器	
ＳＤ208	溝	平安時代末～鎌倉時代初頭	16.8～	1.1	0.2	須恵器・土師器・瓦器・砥石	
ＳＤ215	溝	平安時代末～鎌倉時代初頭？	7.9～	0.6	0.2	—	

第１表　遺構一覧表

【凡例】
※№は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。
※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。
※胎土の色調は『新版　標準土色帖』に拠る。
※色調欄「内」は内面、「外」は外面の色調を表す。
※残存度については、復元される口縁部ないし底部を12分割したうちの残存度を記している。「—」は小片などのため残存度が示せないものである。

№.	実測番号	種別	器種	出土遺構	口径／長径（cm）	底部径／短径（cm）	器高／厚さ（cm）	色調	残存度	備考
1	011-04	縄文土器	深鉢	SH204	—	—	—	内：にぶい黄橙10YR6/4 外：灰黄褐10YR4/2	—	
2	003-05	縄文土器	深鉢	SH204	—	9.7	—	にぶい黄橙10YR6/3	2/12	網代痕
3	001-03	須恵器	坏蓋	SH204	14.2	—	4.7	黄灰2.5Y6/1	1/12	
4	002-04	土師器	坏	SH204	11.7	2.0	4.0	にぶい黄橙10YR6/3	1/12	
5	012-06	土師器	坏	SH204	14.0	—	—	内：黄灰2.5Y5/1 外：明赤褐5YR5/6	1/12	
6	001-02	土師器	甕	SH204	15.2	—	—	橙5YR6/6	1/12	
7	004-03	土師器	甑	SH204	30.2	9.0	30.5	内：にぶい橙5YR6/4 外：橙5YR7/6	2/12	貯蔵穴からも破片出土
8	004-05	須恵器	坏蓋	SH204	13.8	—	5.4	灰7.5Y6/1	2/12	
9	002-01	須恵器	坏身	SH204	11.3	—	4.9	灰5Y6/1	5/12	
10	001-01	須恵器	甕	SH204	21.1	—	—	黄灰2.5Y6/1	4/12	
11	005-02	土師器	坏	SH204	12.0	—	—	内：灰黄褐10YR6/2 外：褐灰10YR6/1	2/12	
12	005-05	土師器	坏	SH204	13.0	—	—	内：灰褐7.5YR4/2 外：黒褐7.5YR3/2	2/12	
13	012-03	土師器	坏	SH204	—	—	—	内：にぶい黄橙10YR7/3 外：にぶい黄橙10YR6/3	1/12	
14	012-05	土師器	坏？	SH204	—	4.0	—	にぶい黄橙10YR7/3	10/12	内面赤色顔料付着
15	011-01	土師器	坏？	SH204	—	4.7	—	内：にぶい橙5YR7/4 外：にぶい黄橙10YR7/4	3/12	壺？
16	013-01	土師器	甕	SH204	17.8	—	—	にぶい黄橙10YR7/3	1/12	
17	013-03	土師器	甕	SH204	—	—	—	内：にぶい橙7.5YR7/4 外：橙5YR7/6	1/12	
18	007-03	土師器	甕	SH204	15.8	—	18.0	内：灰黄褐10YR4/2 外：にぶい褐7.5YR5/4	6/12	
19	012-02	土師器	甕	SH204	—	—	—	内：にぶい黄橙10YR6/4 外：橙5YR6/6	—	
20	012-01	土師器	甕	SH204	—	—	—	内：にぶい黄褐10YR4/3 外：橙2.5YR6/6	—	底部外面にヘラ記号？
21	003-02	須恵器	坏身	SH204	11.8	—	—	灰5Y5/1	1/12	Pit21出土
22	003-04	土師器	壺	SH204	12.9	—	—	橙5YR6/6	2/12	Pit21出土
23	002-02	須恵器	坏蓋	SH204	12.8	—	4.0	灰10Y4/1	1/12	カマド周辺出土
24	003-01	須恵器	坏蓋	SH204	13.2	—	4.9	灰7.5Y5/1	1/12	口縁端部に刻み状の痕跡
25	002-03	須恵器	坏身	SH204	—	—	—	灰7.5Y6/1	1/12	カマド周辺出土
26	003-03	土師器	坏	SH204	12.0	—	—	暗黄灰2.5Y5/2	4/12	カマド前出土
27	002-05	土師器	坏	SH204	13.2	4.0	4.2	内：にぶい赤褐5YR5/3 外：黒褐10YR3/2	3/12	カマド周辺出土
28	012-04	土師器	坏	SH204	15.2	—	5.4	内：にぶい橙5YR6/4 外：明赤褐2.5YR5/6	5/12	
29	007-01	土師器	坏	SH204	11.4	—	5.1	にぶい橙7.5YR6/4	5/12	カマド北側出土
30	007-02	土師器	坏	SH204	12.6	—	—	橙7.5YR7/6	7/12	カマド北側出土
31	013-02	土師器	甕	SH204	16.0	—	—	内：にぶい黄橙10YR6/3 外：橙5YR6/6	1/12	
32	011-03	土師器	甕？	SH204	—	—	—	にぶい赤褐5YR5/4	—	把手
33	006-01	土師器	甕	SH207	18.0	—	—	内：浅黄橙7.5YR8/4 外：橙7.5YR7/6	2/12	カマド出土
34	006-03	土師器	甑	SH207	—	8.4	—	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
35	006-02	土師器	甑	SH207	—	—	—	にぶい褐7.5YR6/3	—	カマド出土

第２表　出土遺物一覧表①

36	010-04	土師器	坏	SH214	10.2	—	—	にぶい橙7.5YR6/4	2/12	
37	010-03	土師器	坏	SH214	—	—	—	内：にぶい黄橙10YR7/3 外：にぶい橙5YR6/4	—	
38	010-02	土師器	高坏	SH214	—	10.2	—	内：橙7.5YR6/6 外：にぶい橙7.5YR6/4	2/12	
39	013-04	土師器	高坏？	SH214	—	18.8	—	にぶい橙7.5YR7/4	5/12	カマド付近出土・円形透孔
40	010-01	土師器	甑	SH214	—	—	—	にぶい橙7.5YR7/4	—	
41	006-04	須恵器	坏身	SB205	13.2	—	—	内：灰N6/0 外：灰N4/0・灰N6/0	2/12	Pit４出土
42	008-04	土師器	甕？	SB205	—	—	—	内：橙5YR6/6 外：明赤褐5YR5/6	—	Pit３出土・高坏脚？
43	009-01	土師器	甑	SB205	—	13.8	—	内：灰褐7.5YR5/2 外：にぶい褐7.5YR5/4	2/12	
44	008-02	土師器	坏	SB209	11.0	—	—	橙5YR7/6	1/12	Pit15出土
45	009-05	土師器	直口壺	SB209	—	—	—	内：褐灰10YR5/1 外：灰黄褐10YR5/2	—	Pit２出土
46	008-03	土師器	壺	SB209	—	4.9	—	内：灰白10YR8/2 外：にぶい黄橙10YR7/3	7/12	Pit16出土
47	008-01	土師器	甕	SB209	—	—	—	内：にぶい橙7.5YR6/4 外：橙7.5YR6/4	—	Pit１出土
48	008-06	土師器	不明	SK203	—	—	—	内：灰黄褐10YR5/2 外：にぶい黄橙10YR6/3	—	高坏か鉢？
49	008-07	須恵器	甕	SK203	—	—	—	灰白7.5Y7/1	—	
50	004-01	瓦器	椀	SK210	—	—	—	内：灰白7.5Y8/1 外：灰N5/0	—	
51	004-02	瓦器	皿	SK211	8.6	—	1.2	灰N5/0	11/12	
52	008-05	土師器	小皿	SD202	8.6	7.0	1.1	にぶい橙7.5YR6/4	5/12	
53	009-02	須恵器	坏身	SD208	—	—	—	灰N6/0	2/12	
54	009-04	土師器	小皿	SD208	8.2	6.0	1.2	浅黄橙10YR8/3	1/12	
55	009-03	瓦器	椀	SD208	—	—	—	灰N5/0	—	
56	009-06	石製品	砥石	SD208	12.6	7.5	6.0	—	半欠？	砂岩・715ｇ
57	006-05	瓦器	椀	Pit17	—	—	—	灰N5/0	—	

第３表　出土遺物一覧表②

写　真　図　版

掘削前状況（南東から）

調査区全景（東から）

写真図版２

ＳＨ204（南から）

ＳＨ204カマド検出状況

ＳＨ204貯蔵穴遺物出土状況①

ＳＨ204貯蔵穴遺物出土状況②

ＳＨ204（東から）

ＳＢ205（北西から）

ＳＢ206（南東から）

ＳＢ206（東から）

ＳＢ209・ＳＨ207（北東から）

ＳＢ209・ＳＨ207（北から）

写真図版４

出土遺物①

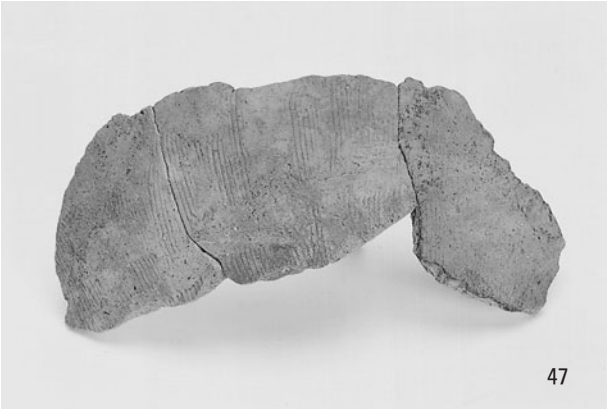
出土遺物②

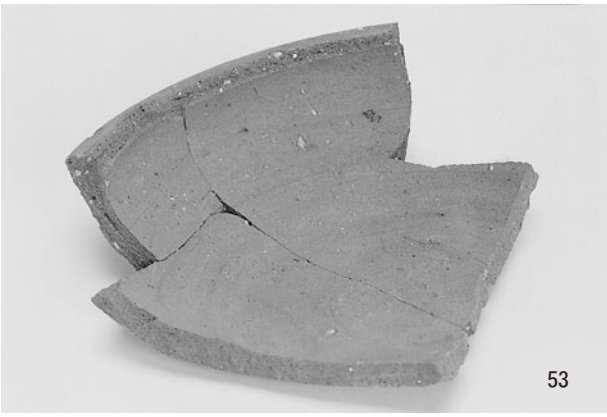
写真図版６

出土遺物③

出土遺物④

写真図版８





出土遺物⑤

報　告　書　抄　録

ふりがな	てんどういせき（だいにじ）はっくつちょうさほうこく
書名	天道遺跡（第２次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	320
編著者名	石井智大
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL　0596-52-1732
発行年月日	西暦2010年10月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天道遺跡（てんどういせき）	伊賀市西之澤（いがしにしのさわ）	216b	164	34° 48′ 27″	136° 11′ 17″	2007.10.1～ 2007.10.15	593	平成19年度柘植川水管橋下部工事及び取り付け配管工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天道遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 平安時代～鎌倉時代	竪穴住居 土坑 掘立柱建物 土坑 溝	縄文土器 土師器・須恵器 土師器・瓦器	

要約	古墳時代後期の竪穴住居が３棟検出され、第１次調査の成果と合わせて伊賀地域における古墳時代後期集落の様相を知る上で良好な事例となった。また、平安時代後期～鎌倉時代初頭のものと思われる掘立柱建物や溝なども検出された。

三重県埋蔵文化財調査報告320

天道遺跡（第２次）発掘調査報告

２０１０年１０月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印刷　　光出版印刷株式会社